798-167
1200501607577
798
167

漢魏金石集

巻三

798
167

目次

龍潭譚（明治二十九年十一月）……一
勝手口（明治二十九年十一月）……三五
X蟷螂鰒鐵道（明治二十九年十二月）……八七
化鳥（明治三十年四月）……一一三
凱旋祭（明治三十年五月）……一五一
堅パン（明治三十年五月）……一六三
さゝ蟹（明治三十年五月）……一七九
風流蝶花形（明治三十年六月）……二〇七

清心庵（明治三十年七月）……二三七
怪語（明治三十年八月）……二六五
なゝもと櫻（明治三十年十月）……三〇三
髯題目（明治三十年十二月）……四四三
山中哲學（明治三十年十二月）……五三五
暗まぎれ（明治三十年十二月）……五八三
玄武朱雀（明治三十一年一月）……六〇三

龍潭譚

躑躅か丘　鎭守の社　かくれあそび　あふ魔が時　大沼

五位鷺　九ツ谺　渡船　ふるさと　千呪陀羅尼

躑躅か丘

日は午なり。あら〳〵木のたら〳〵坂に樹の蔭もなし。寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挾みて町の入口にはあたれど、のぼるに從ひて、たゞ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき處に見ゆ。谷には菜の花殘りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。

空よく晴れて一點の雲もなく、風あたゝかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯かで、しのびて來つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一束の薪をかつぎたる漢おり來れり。眉太く、眼の細きが、向ざまに顱卷したる、額のあたり汗になりて、のし〳〵と近づきつゝ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ〳〵。」

といひずてに眦に皺を寄せてさつ〳〵と行過ぎぬ。

見返ればハヤたら〳〵さがりに、其肩躑躅の花にかくれて、髪結ひたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの徑遠く、小川流るゝ谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の兒の手をひきて彼方にゆく背姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。

行く方も躑躅なり。來し方も躑躅なり。山土のいろもあかく見えたる、あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に歸らむと思ふ時、わが居たる一株の躑躅のなかより、羽音たかく、蟲のつと立ちて頰を掠めしが、かなたに飛びて、およそ五六尺隔てたる處に礫のありたる其わきにとゞまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかゝれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五六尺ばかりのところにとまりたり。其まゝ小石を拾ひあげて狙ひうちし、石はそれぬ。蟲はくるりと一ツまはりて、また舊のやうにぞ居る。追ひかくれば迅くもまた遁げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラ〳〵とさゝやかなる羽ばたきして、鷹揚に其二すぢの細き髭を上下にわづくりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。其居たるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呟きざま、躍りかゝりてハタと打ちし、拳はいたづらに土によごれぬ。

渠は一足先なる方に悠々と羽づくろひす。憎しと思ふ心を籠めて瞻りたれば、蟲は動かずなりたり。つく〴〵見れば羽蟻の形して、それよりもやゝ大なる、身はたゞ五彩の色を帶びて青みがちにかゞやきたる、うつくしさいはむ方なし。

色彩あり光澤ある蟲は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出でたれば、打置きてすご〳〵と引返せしが、足許にさきの石の二ツに碎けて落ちたるより俄に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒蟲をねらひたり。

このたびはあやまたず、したゝかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくゞりて小砂利をさそひ、ばら〳〵と谷深くおちゆく音しき。

袂のちり打はらひて空を仰げば、日脚やゝ斜になりぬ。ほか〳〵とかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頰のあたりむず痒きこと限りなかりき。

心着けば舊來し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけ居たり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねり〳〵果しなきに、兩側づゞきの躑躅の花、遠き方は前後を塞ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの眞蒼き下に、彳むはわれのみなり。

鎭守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つ盡ればまたあらたに顯る。起伏恰も大波の如く打續きて、いつ坦ならむとも見えざりき。

あまり倦みたれば、一ッおりてのぼる坂の窪に踞ひし、手のあきたるまゝ何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出來たり。くといふ字も書きたり。曲りたるもの、直なるもの、心の趣くまゝに落書したり。しがなせるあひだにも、頰のあたり先刻に毒蟲の觸れたらむと覺ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出來たるを、姉に見せばやと思ふに、俄に其顏の見たうぞなりたる。

立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透かで躑躅咲きたり。日影ひとしほ赤うなりまさりたるに、手を見たれば掌に照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯見ればおなじ躑躅のだら〳〵おりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでか恁てあらむ、こたびこそと思ふに違ひて、道はまた蜿れる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顏なつかしく、しばらくも得堪へずなりたり。再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きて居つ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある處に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにぱつと茜さして、眼もあやに躑躅の花、たゞ紅の雪の降積めるかと疑はる。

われは涙の聲たかく、あるほど聲を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遙に瀧の音聞えたり。どう〳〵と響くなかに、いと高く冴えたる聲の幽に、

「もういゝよ、もういゝよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隱れ遊びといふものするあひ圖なることを認め得たる、一聲くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やう〳〵心たしかに其の聲したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰おろせば、あまり雜作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷ひたる紅の雪のなかをばのがれつ。背後には躑躅の花飛び〳〵に咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内の手洗水のあたりを籠めたり。柵結ひたる井戸ひとつ、銀杏の古りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀あり。此方は裏木戸のあき地にて、むかひに小さ

き稲荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鐵の輪を嵌めたるさへ、心たしかに覺えある、こゝよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。たゞひとへにゆふ日照りそひたるつゝじの花の、わが丈よりも高き處、前後左右を唉埋めたるあかき色のあかきがなかに、綠と、紅と、紫と、青白の光を羽色に帶びたる毒蟲のキラ〳〵と飛びたるさまの廣き景色のみぞ、畫の如く小さき胸にゑがかれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姊にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯かで一人いで來しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顏をあはせて謂ひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に歸らむとはおもはず。ひとり境内に彳みしに、わッといふ聲、笑ふ聲、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる兒の五六人前後に走り出でたり、こはかくれ遊びの一人が見いだされたるものぞとよ。二人三人走り來て、わが其處に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勸めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、……といふものなりとぞ。風俗少しく異なれり。兒どもが親達の家富みたるも好き衣着たるはあらず、大抵跣足なり。三味線彈きて折々わが門に來るもの、溝川に鰌を捕ふるもの、附木、草履など鬻ぎに來るものだちは、皆この兒どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒めつ。然るに町方の者としいへば、……なる兒ども尊び敬ひて、頃刻もともに遊ばんことを希ふや、親しく、優しく勉めてすなれど、不斷は此方より遠ざかりしが、其時は先にあまり淋しくて、友欲しき念の堪へがたかりし其心のまだ失せざると、恐しかりしあとの樂しきとに、われは拒まずして頷きぬ。

兒どもはさゞめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすものを定めしに、われ其任にあたりたり。面を蔽へといふまゝにしつ。ひッそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる瀧の音どう〳〵と松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ」

と呼ぶ聲、谺に響けり。眼をあくればあたり靜まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ來れり。大なる樹のすく〳〵とならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隱れむとす。

聲したる方をと思ふ處には誰も居らず。こゝかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また舊の境内の中央に立ちて、もの淋しく瞶しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、関としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき兒どもなれば、かゝる機會を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまゝ密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをと不圖思ひうかぶに、うちすてて踵をかへしつ。さるにても萬一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることを得ざるべし、それもまたはかり難しと、心迷ひて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、何處より來りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃いたる土のひろ〳〵と灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍に居て、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、其手を懐にして肩を垂れたり。優しきこゑにて、

「此方へおいで。此方。」

といひて前に立ちて導きたり。見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人と思ひたれば、怪しまで、隠れたる兒のありかを教ふるとさとりたれば、いそ〳〵と從ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ處に違はず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あたりに小さき稲荷の社あり。青き旗、白き旗、二三本其前に立ちて、うしろはたゞちに山の裾なる雑樹斜めに生ひて、社の上を蔽ひたる、其下のをぐらき處、孔の如き空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたゝるばかり斜にわが顔を見て動けるほどに、あきらかに其心ぞ讀まれたる。

さればいさゝかもためらはで、つか〳〵と社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉、堆く水くさき土のにほひしたるのみ、人の氣勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またゝくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。何方にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず啊呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然として眼を睜りぬ。足ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左

手に坂あり。穴の如く、其底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々たる坂下より、もののぼるやうなれば、こゝにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮もなさで社の裏の狹きなかににげ入りつ。眼を塞ぎ、呼吸をころしてひそみたるに、四足のものの歩むけはひして、社の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女のうつくしかりし顏、優かりし眼を忘れず。こゝをわれに教へしを、今にして思へばかくれたる兒どものありかにあらで、何等か恐しきもののわれを捕へむとするを、こゝに潛め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯の火影あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひそみたる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて來りし感あり。

恰も其立留りし折から、別なる跫音、また坂をのぼりてさきのものと落合ひたり。

「おい〳〵分らないか。」

「ふしぎだな、なんでも此邊で見たといふものがあるんだが。」

とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の聲に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ增しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も賴む。」

「それでは。」といひて上下にばら〳〵と分れて行く。

再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顏少し差出だして、外の方をうかゞふに、何ごともあらざりければ、やゝ落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚なる、と冷かに笑ひしに、思ひがけず、誰ならむたまぎる聲して、あわてふためき遁ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の聲なりき。

大沼

「居ないツて私あ何うしよう、爺や。」

「根ッから居さつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前樣遊びに出します時、帶の結めを丁とたゝいてやらつしやれば好いに。」

「あゝ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそツと出て行つたらうではないかねえ。」

「それはハヤ不念なこんだ。帶の結めさへ叩いときや、何がそれで姉様なり、母様なりの魂が入るもんだで魔めは何うすることもしえないでごす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語らひつゝ、社の前をよこぎりたまへり。

走りいでしが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪みたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早や其姿は見えざりき。

涙ぐみて彳む時、ふと見る銀杏の木のくらき夜の空に、大なる圓き影して茂れる下に、女の後姿ありてわが眼を遮りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに聲かけて、なまじひにわが此處にあるを知られむは、拙きわざなればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、其姿またかくれ去りつ。見えずなればなほなつかしく、たとへ恐しきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化したる上は、われを捕へてむごからむや。さきなるは然もなくて、いま幻に見えたるがまこと其人なりけむもわかざるを、何とて言はかけざりしと、打泣きしが、かひもあらず。

あはれさま〴〵のものの怪しきは、すべてわが眼のいかにかせし作用なるべし、さらずば涙に

くもりしや、術こそありけれ、かなたなる御手洗にて清めてみばやと寄りぬ。

煤けたる行燈の横長きが一つ上にかゝりて、ほとゝぎすの畫と句など書いたり。灯をともしたるに、水はよく澄みて、青き苔むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬ばむとしてうつむく時、思ひかけず見たるわが顏はそも〳〵いかなるものぞ。覺えず叫びしが心を籠めて、氣を鎭めて、兩の眼を拭ひ〳〵、水に臨む。

われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかゝるべき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわなゝきながら見直したる、肩をとらへて聲ふるはし、

「お、お、千里。えゝも、お前は。」と姉上ののたまふに、縋りつかまくみかへりたる、わが顏を見たまひしが、

「あれ！」

といひて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝と馳せ去りたまへり。

怪しき神のさま〴〵のことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつゝ、ひたばしりに追ひかけぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらもののの口惜しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路と覺しき町にも出でたり、暗き徑も辿りたり、野もよこぎりぬ。畦も越えぬ。あとをも見ずて駈けたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く横はりて、黑き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覺しきが、前途を塞ぐと覺ゆる蘆の葉の繁きがなかにわが身體倒れたる、あとは知らず。

五位鷺

眼のふち清々しく、涼しき薫つよく薫ると心着く、身は柔かき蒲團の上に臥したり。やゝ枕をもたげて見る、竹緣の障子あけ放して、庭つゞきに向ひなる山懷に、綠の草の、ぬれ色青く生茂りつ。其半腹にかゝりある巖角の苔のなめらかなるに、一挺はだか蠟に灯ともしたる灯影すゞしく、筧の水むく〳〵と湧きて玉ちるあたりに盥を据ゑて、うつくしく髮結うたる女の、身に一絲もかけで、むかうざまにひたりて居たり。

筧の水は其たらひに落ちて、溢れにあふれて、地の窪みに流るゝ音しつ。

蠟の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちら〳〵と眼に映ずる雪なす膚白

かりき。

わが寢返る音に、ふと此方を見返り、それと頷く狀にて、片手をふちにかけつゝ片足を立てて盥のそとにいだせる時、颯と音して、烏より小さき鳥の眞白きがひら〳〵と舞ひおりて、うつくしき人の脛のあたりをかすめつ。其まゝおそれげもなう翼を休めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣もて其胸をば蔽へり。鳥はおどろきてはた〳〵と飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蠟を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに緣の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして捩向きざま、わがかほをば見つ。

「氣分は癒つたかい、坊や。」

といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面げだかく、眉あざやかに、瞳すゞしく、鼻やゝ高く、唇の紅なる、額つき頰のあたり薄たけたり。こは豫てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつく〳〵みまもりぬ。

またほゝゑみたまひて、

「お前あれは斑猫といつて大變な毒蟲なの。もう可いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつ

た、あれでは姉様が見違へるのも無理はないのだもの。」

われも然あらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふまゝに頷きつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜着の肩、ながく柔かにおさへたまへり。

「ぢつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着いて、ね、氣をしづめるのだよ、可いかい。」

われはさからはで、たゞ眼をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のし〳〵と道芝を踏む音して、つゞれをまとうたる老夫の、顏の色いと赤きが緣近う入り來つ。

「はい、これはお兒さまがござらつせえたの、可愛いお兒ぢや、お前樣も嬉しかろ。はゝゝ、どりや、またいつものを頂きましよか。」

腰をなゝめにうつむきて、ひつたりとかの筧に顏をあて、口をおしつけてごつ〳〵とたてつゞけにのみたるが、ふッといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれ〳〵甘いことかな。はい、參ります。」

と踵を返すを、此方より呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦勞だが。また來ておくれ、この兒を返さねばならぬから。」

「あい〳〵。」

と答へて去る。山風颯とおろして、彼の白き鳥また翔ちおりつ。黑き盥のふちに乘りて羽づくろひして靜まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寢させてあげよう、どれそんなら私も。」とて靜に雨戸をひきたまひき。

九ツ谺

やがて添臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故にや、わが膚をり〳〵慄然たりしが何の心もなうひしと取縋りまるらせぬ。あとを〳〵といふに、をさな物語二ツ三ツ聞かせ給ひつ。やがて、

「一ツ谺、坊や、二ツ谺といへるかい。」

「二ツ谺。」

「三ツ谺、四ツ谺といつて御覽。」

「四ツ谺。」

「五ツ谺。そのあとは。」
「六ツ谺。」
「さう〳〵七ツ谺。」
「八ツ谺。」
「九ツ谺――こゝはね、九ツ谺といふ處なの。さあもうおとなにして寢るんです。」
背に手をかけ引寄せて、玉の如き其乳房をふくませたまひぬ。露に白き襟、肩のあたり鬢のおくれ毛はら〳〵とぞみだれたる、かゝるさまは、わが姉上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず。
ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年を經つ。乳の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉の乳房たゞ淡雪の如く含むと舌にきえて觸るゝものなく、ずゞしき唾のみぞあふれいでたる。
輕く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天井の上と覺し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。こゝにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わなゝき取つくを抱きしめつゝ、
「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」
とキとのたまへば、やがてぞ靜まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」
とある、さりげなきも、われはなほ其響のうちにものの叫びたる聲せしが耳に殘りてふるへたり。
うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蒔繪ものの手箱のなかより、一口の守刀を取出しつゝ鞘ながら引そばめ、雄々しき聲にて、
「何が來てももう恐くはない、安心してお寢よ。」とのたまふ、たのもしき狀よと思ひてひたと其胸にわが顏をつけたるが、ふと眼をさましぬ。殘燈暗く床柱の黑うつやゝかにひかるあたり薄き紫の色籠めて、香の薫殘りたり。枕をはづして顏をあげつ。顏に顏をもたせてゆるく閉たまひたる眼の睫毛かぞふるばかり、すや〳〵と寢入りて居たまひぬ。ものいはむとおもふ心おくれて、しばし瞻りしが、淋しさにたへねばひそかに其唇に指さきをふれて見ぬ。指はそれて唇には屆かでなむ、あまりよくねむりたまへり。鼻をやつまむ眼をやおさむとまたつくづくと打まもりぬ。ふと其鼻頭をねらひて手をふれしに空を捻りて、うつくしき人は雛の如く顏の筋ひとつゆるみもせざりき。またその眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするやう、わが顏は其おくれげのはしに頰をなでらるゝまで近々とありながら、いかにしても指さきは其顏に屆かざるに、はては心いれて、乳の下に面をふせて、強く額もて壓したるに、顏にはたゞあたゝ

かき霞のまとふとばかり、のどかにふは〳〵とさはりしが、薄葉一重の支ふるなく着けたる額はつと下に落ち沈むを、心着けば、うつくしき人の胸は、もとの如く傍にあをむき居て、わが鼻は、いたづらにおのが膚にぬくまりたる、柔き蒲團に埋れて、をかし。

渡船

夢幻ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元のまま柔かに力なげに蒲團のうへに垂れたまへり。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指をひらきて黄金の目貫キラ〳〵とうつくしき鞘の塗の輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳のあたりに落して据ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼のほゝ笑む如き、髪のさら〳〵したる、枕にみだれかゝりたる、それも違はぬに、胸に劍をさへのせたまひたれば、亡き母上の爾時のさまに紛ふべくも見えずなむ、コハこの君もみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除けなむと、胸なる其守刀に手をかけて、つと引く、せつぱゆるみて、青き光眼を射たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐さとほとばしりぬ。眼もくれたり。した〳〵とながれにじむをあなやと兩の拳

もてしかとおさへたれど、留まらで、たふ〳〵と音するばかりぞ淋漓としてながれつたへる、血汐のくれなる衣をそめつ。うつくしき人は寂として石像の如く靜なる鳩尾のしたよりしてやがて半身をひたし盡しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈にすかす指のなかの紅なるは、人の血の染みたる色にはあらず、訝しく撫で試むる掌の其血汐にはぬれもこそせね、こゝろづきて見定むれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すゞしの絹をすきて見ゆる其膚にまとひたまひし紅の色なりける。いまはわれにもあらで聲高に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりしが、效なくてなむ、ひた泣きに泣く〳〵いつのまにか寢たりと覺し。顔あたゝかに胸をおさるゝ心地に眼覺めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫の背に負はれて、とある山路を行くなりけり。うしろよりは彼のうつくしき人したがひ來ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送りたまふならむと推はかるのみ、わが胸の中はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出でていはむは益なし。教ふべきことならむには、彼方より先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に歸るべきわが運ならば、強ひて止まらむと乞ひたりとて何かせん、さるべきいはれあれば

こそ、と大人しう、ものもいはでぞ行く。

斷崖の左右に聳えて、點滴聲する處ありき。雜草高き徑ありき。松柏のなかを行く處もありき。きゝ知らぬ鳥うたへり。褐色なる獸ありて、をり〳〵叢に躍り入りたり。ふみわくる道とにもあらざりしかど、去年の落葉道を埋みて、人多く通ふ所としも見えざりき。

をぢは一挺の斧を腰にしたり。れいによりてのし〳〵とあゆみながら、茨など生ひしげりて、衣の袖をさへぎるにあへば、すか〳〵と切つて拂ひて、うつくしき人を通し參らす。されば山路のなやみなく、高き塗下駄の見えがくれに長き裾さばきながら來たまひつ。

かくて大沼の岸に臨みたり。水は漫々として藍を湛へ、まばゆき日のかげも此處の森にはさゝで、水面をわたる風寒く、颯々として聲あり。をぢはこゝに來てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱きたまふ、衣の袖左右より長くわが肩にかゝりぬ。

蘆間の小舟の纜を解きて、老夫はわれをかゝへて乘せたり。一緒ならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乘りたまはず、さらばとのたまふはしに棹を立てぬ。船は出でつ。わッと泣きて立上りしがよろめきてしりゐに倒れぬ。舟といふものにははじめて乘りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後に居たまへりとおもふ人の大なる環にまはりて前途なる汀に居たまひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手なる汀に見えき。見る〳〵右手な

る汀にまはりて、やがて舊のうしろに立ちたまひつ。箕の形したる大なる沼は、汀の蘆と、松の木と、建札と、其傍なるうつくしき人ともろともに緩き環を描いて廻轉し、はじめは徐ろにまはりしが、あと〳〵急になり、疾くなりつ、くるく〳〵と次第にこまかくまはる〳〵、わが顏と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき處に松の木にすがりて見えたまへる、とばかりありて眼の前にうつくしき顏の藹たけたるが莞爾とあでやかに笑みたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶けて船より出だしつ。また其背を向けたり。

「泣くでねえ〳〵。もうぢきに坊ッさまの家ぢや。」と慰めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてたゞ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうちかけらるゝやう肩に負はれて、顏を垂れてぞともなはれし。見覺えある板塀のあたりに來て、日のやゝくれかゝる時、老夫はわれを抱き下して、溝のふちに立たせ、ほく〳〵打ゑみつゝ、慇懃に會釋したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」
といひずてに何地ゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あと追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくともなく歩をうつすに、頭ふら〳〵と足の重たくて行悩む、前に行くも、後ろに歸るも皆見知越のものなれど、誰も取りあはむとはせで往きつ來りつす。さるにてもなほものありげにわが顏をみつゝ行くが、冷かに嘲るが如く憎さげなるぞ腹立しき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とぼ〳〵とまた山ある方にあるき出しぬ。
けたゝましき跫音して鷲掴に襟を掴むものあり。あなやと振返ればわが家の後見せる奈四郎といへる力逞ましき叔父の、凄まじき氣色して、
「つまゝれめ、何處をほッつく。」と喚きざま、引立てたり。また庭に引出して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさへたる手をゆるべず、
「しつかりしろ。やい。」
とめくるめくばかり背を拍ちて宙につるしながら、走りて家に歸りつ。立騒ぐ召つかひどもを叱りつも細引を持て來さして、しかと兩手をゆはへあへず奥まりたる三疊の暗き一室に引立てゆきて其まゝ柱に縛めたり。近く寄れ、喰さきなむと思ふのみ、齒がみして睨まへたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆つりたる眦は憑きもののわざよとて、寄りたかりて口々にのゝしるぞ無念

なりける。
おもての方さゞめきて、何處にか行き居れる姉上歸りましつと覺し、襖いくつかぱた〳〵と音してハヤこゝに來たまひつ。叔父は室の外にさへぎり迎へて、
「ま、やつと取返したが、繩を解いてはならんぞ。もう眼が血走つて居て、すきがあると駈け出すぢや。魔どのがそれしよびくでの。」
と戒めたり。いふことよくわが心を得たるよ、然り、隙だにあらむにはいかでかこゝにとゞまるべき。
「あ。」とばかりにいらへて姉上はまろび入りて、ひしと取着きたまひぬ。ものはいはでさめ〴〵とぞ泣きたまへる、おん情手にこもりて抱かれたるわが胸絞らるゝやうなりき。
姉上の膝に臥したるあひだに、醫師來りてわが脈をうかゞひなどしつ。叔父は醫師とともに彼方に去りぬ。
「ちさや、何うぞ氣をたしかにもつておくれ。もう姉様は何うしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」
といきつく〴〵ぢつとわが顏をみまもりたまふ、涙痕したゝるばかりなり。
其心の安んずるやう、強ひて顏つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おゝ、薄氣味が悪いねえ。」

と傍にありたる奈四郎の妻なる人呟きて身ぶるひしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことども責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑を解かむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問ひ、葉問ひするに一々説明かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつゝ心に何をかいひたる。

やうやくいましめはゆるされたれど、なほ心の狂ひたるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑を増すをいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。血色わるくなりて痩せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見の叔父夫婦にはいとせめて祕しつゝ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色見せたまひしに、門邊にありたる多くの兒ども我が姿を見ると、一齊に、アレさらはれものの、氣狂の、狐づきを見よやといふ〳〵、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不斷親しかりし朋達なり。

姉上は袖もてわれを庇ひながら顏を赤うして遁げ入りたまひつ。人目なき處にわれを引据ゑつと見るまに取つて伏せて、打ちたまひぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわたゞしく背をばさすりて、

「堪忍しておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」

といひかけて、

「私あもう氣でも違ひたいよ。」としみ〴〵と搔口説きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何とてさはあやまるや、世にたゞ一人なつかしき姉上までわが顏を見るごとに、氣を確に、心を鎭めよ、と涙ながらいはるゝにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう其毎になりまさりて、果はまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

たとへば怪しき絲の十重二十重にわが身をまとふ心地しつ。しだい〳〵に暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。それをば刈拂ひ、遁出でむとするに其術なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉を顰め、嘲り、笑ひ、卑め、罵り、はた悲み憂ひなどするにぞ、氣あがり、心激し、たゞじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまゝ身の周圍はことゞ〳〵く敵ぞと思はるゝ。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。塵一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化したるにて、恐しきあやしき神のわれを惱まさむとて現じたるものならむ。されば姉がわが快復を祈る言もわれに心を狂はすやう、わざと然はいふならむと、一たびおもひては堪ふべからず、力あらば恣にともかくもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔むしらむ、透あらばとびいでて、九ツ衢と

をしへたる、たふときうつくしきかのひとの許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、ふたゝび暗室にいましめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑へばものも食はず、藥もいかでか飲まむ、うつくしき顏したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵り叫びてあれたりしが、つひには聲も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつら〳〵舁きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、赤土の色きれいに掃きたる一條の道長き、右左、石燈籠と石榴の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはる〴〵續きたるを行きて、香の薫しみつきたる太き圓柱の際に寺の本堂に据ゑられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破る響きこえて、僧ども五三人一齊に聲を揃へ、高らかに誦する聲耳を聾するばかり喧ましさ堪ふべからず、禿顱ならび居る木のはしの法師ばら、何をかすると、拳をあげて一人の天窓をうたむとせしに、一幅の青き光颯と窓を射て、水晶の念珠瞳をかすめ、ハッシと胸をうちたるに、ひるみて踞まる時、若僧圓柱をいざり出でつゝ、つい居て、サラ〳〵と金襴の帳

を絞る、燦爛たる御廚子のなかに尊き像こそ拜まれたれ。一段高まる經の聲、トタンにはたゝがみ天地に鳴りぬ。

端嚴微妙のおんかほばせ、雲の袖、霞の袴ちら〳〵と瓔珞をかけたまひたる、玉なす胸に纖手を添へて、ひたと、をさなごを抱きたまへるが、仰ぐ〳〵瞳うごきて、ほゝゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかゝりて、姉上は念じたまへり。

瀧や此堂にかゝるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦いて寄する風の音、遠き方より呻り來て、どつと滿山に打あたる。

本堂青光して、はゝたがみ堂の空をまろびゆくに、たまぎりつゝ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝にはひあがりて、ひしと其胸を抱きたれば、かゝるものをふりすてむとはしたまはで、あたゝかき腕はわが背にて組合はされたり。さるにや氣も心もよわ〳〵となりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼を呪する聖の聲々さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くもの凄きに、身の置處あらずなりぬ。からだひとつ消えよかしと兩手を肩に縋りながら顏もて其胸を押しわけたれば、襟をば搔きひらきたまひつゝ、乳の下にわがつむり押入れて、兩袖を打かさねて深くわが背を蔽ひ給へり。御佛の其をさなごを抱きたまへるも斯くこそと嬉しきに、おちるて、心地すが〳〵しく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪もは

てたる。雷の音も遠ざかる。わが背をしかと抱きたまへる姉上の腕もゆるみたれば、ソと其懐より顔をいだしてこは〳〵其顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかはらでなむ、いたくもやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外をうかゞふことだにならざる、靜まるを待てば夜もすがら暴通しつ。家に歸るべくもあらねば姉上は通夜したまひぬ。其一夜の風雨にて、くるま山の山中、俗に九ツ谺といひたる谷、あけがたに杣のみいだしたるが、忽ち淵になりぬといふ。

里の者、町の人皆擧りて見にゆく。日を經てわれも姉上とともに來り見き。其日一天うらゝかに空の色も水の色も靑く澄みて、軟風おもむろに小波わたる淵の上には、塵一葉の浮べるあらで、白き鳥の翼廣きがゆたかに藍碧なる水面を横ぎりて舞へり。

すさまじき暴風雨なりしかな。此谷もと藥研の如き形したりきとぞ。

幾株となき松柏の根こそぎになりて谷間に吹倒されしに山腹の土落ちたまりて、底をながるゝ谷川をせきとめたる、おのづからなる堤防をなして、凄まじき水をば湛へつ。一たびこのところ決潰せむか、城の端の町は水底の都となるべしと、人々の恐れまどひて、怠らず土を裝り石を伏せて堅き堤防を築きしが、恰も今の關屋少將の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩なりし常磐木もハヤ丈のびつ。草生ひ、苔むして、いにしへよりかゝりけむと思ひ紛ふばかりなり。

あはれ礫を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血氣なる友のいたづらを叱り留

めつ。年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて肅然とせり。

勝手口

一

背戸、庭、園生の垣つゞき、家まばらなる高臺に朝霧の立籠めたる、地上には濃かに、軒端、屋の棟、森の梢など、しら〳〵とあけゆく空の、薄紫なる、紅なる、朝顔一齊に咲き揃ひて、二葉三葉うら見ゆる風少し渡るにぞ、低きあたりやがて晴れて、高き處に濃くなりゆく、一面の霧の中に、黍殼の倒れ伏して、地の色太く濡れたる、垣と垣との徑を傳ひて十六七になりたらむ色白き女一人、足早に來懸りたり。

髪は引詰めたる銀杏返に、小さき菊の花の簪を插める、色も香も身の裝はそれのみにて、紺の半纏、腹掛におなじ股引の俠なる扮裝、背の處赤き丸の中に一字大きく染め拔きたる牛乳を配達する女なり。手頃の籠を持てるなかに瓶幾個か納れてぞ提げたる。

女は其徑を辿り盡して、やゝ廣き通りに出でむとしつ。年少き一人の士官の曲角なる垣根に立ちて、裏木戸にからみ咲きたる朝顔の花を眺めたるが、ふと此方を見向くに、立停りて小腰を屈めつ。

「早いな。」と聲を懸けて士官は其まゝ立去れり。

女は傍目も觸らで小走りに路を急ぎ、とある裏庭にめぐり入りて、突あたりの井の傍なる、勝手口をあけながら、

「お早う。」と聲優しく戸の內を差覗きて、

「あら、お起き遊ばしたの。」

鐵火箸を杖に俯向いたる頭重げに、寢亂髪に顱卷して、下〻の寢衣姿、襟深う搔合せて、絲織の半纏を引懸けたる肩をすぼめ、竈の前に片膝たてて釜の下をたきつけ居れる二十五六のうつくしきが、女の呼ぶ聲に見返りて、

「おや、御苦勞樣。」

「もう、起きても宜しいの。」

と女は水口より半分ばかり顔だけ出してとひかけぬ。

「ありがたう。段々快い方でござんす。」

とわけもなくいふを瞻りつゝ、

「でも、顏の色が惡いのねえ。無理しちやあいけないよ。ちよいと、あの、私が御膳焚になつてあげようや。休んでおいでな、ねえ。」

此方は莞爾とわらひかけて、
「お前さんもねえ。氣樂ぢやないか。」
「なぜ、え、なぜだよ。」
「だつて、まあ、お商賣を何うおしだ。まだちつともおまはりぢやあないと見えて、籠ン中は一ぱいぢやあないかね。」
「さうね。」
と籠を見て打微笑み、
「それはね、さうだけれど、だつて、また其上へ風邪をおひきだとわるいものを。」
と顰む。眉つきりゝしく眼は少しきれあがりたれど、ものをいふ時打傾く、おのづから愛嬌あり。
「なあにもうそんなに案じておくれでない。」
と釜のふたに手をかけしが、アツゝと白き手に胸をおして、空を仰ぎ、眼を細めて、はぎしみをキリゝとする時、思はず横ざまに火箸を倒す。

二

女は慌てて背後へまはり、背を撫でながら縋りつきて、
「たんといたむかい。」
無言なり。
「何うしよう。アレちよいと！」と聲立つる。
爾時ほつといきをつきぬ。
「あゝ、あゝ、もう可うござんす。ちよい〳〵斯うだけれど、直ぐなほるの。何、何ともないから起さないでおくれ。あの兒もお前、私の看病やら、勉强やらで、ゆうべはひどく夜更しをしてるから、眠いわね、可いよ、もうよくなつた。さあ、」
女はやう〳〵手を放しつ。
「それではだいじないのかえ。あゝ、よかつた。私何うしようと思つたの。切ないと見えて恐い顏をすることね。」
「愛想をおつかしかい。」
「まあ。」と笑ふ。
「さあ〳〵、いゝからまはつて來ておくれ、おかげさまで助かりました。」
と裝うて快よげなり。女は少し安心して、

「それでは大急ぎで濟して來ようや。」
「たいていではないね、何軒あるえ。」
「何ね、近所だけ二十軒ばかり……直ぐだわ。」
「ぢやあいつておいで。御苦勞樣。」
「あい。」
と行きかけしが小戻しつ。
「あゝ、水を汲んどいてあげようや。」
「お氣の毒だねえ。いま私が汲むから。」
「何わけやない。一釣瓶、さあお出し。」
「ぢやあさうしておくれだと嬉しいね。汲置だから。何うも濟まないこと。」
「可いッてば！」
女は手桶を提げて井戸端へ。
「危いよ、深いから、重くッてねえ。」
「大丈夫よ。」
と氣さくもの、印半纏の甲斐々々しさ、二の腕白く袖をかゝげて、井戸繩に手を掛くるを不意

に背後より押へとゞめ、
「どつこい。お前にそんなことをさしちや濟まん。人を、朝寢坊だと思つて、ちやんと起きてるんだ。姉樣てば起しちやあくれないで、そッとして置くから不可い。もゝ可いよ、僕が汲まあ。」
といきなり繩を手繰かくるは十八ばかりの少年なり。
牛乳屋の女、
「あら、お眼覺なの。」
「今眼が覺めたから門へ新聞を取りに行つて見ると、牛乳屋さんだ。姉樣の病氣のうちや、僕が何でもするんだから、他人手は借りない。お退きよ。」
女は怨めしげに、
「でも、折角、何ですから、私が汲んであげませう。」
「可いよ。」
「あら、汲まして下さいな。男の方がそんなことするもんぢやありません。」
「かまはないよ。」
「見ッともなうござんすからさ。」
少年は笑ひながら、

「可いよ、姉様のお手つだひは僕がするんだ。おかまひでない。」
と邪險に押退くれば、此方も意地、
「そんなこと遊ばすとお仙さんにいッつけますから可うござんす。あれ、姉さん。」
「誰が恐がるもんか。えゝ、邪魔アすると腕を曲げるぞ。」
手と手と退け合ひ、拂ひあひて、いたちごッこするやうに、二人がなかよく爭ひたる、井戸の中より、雀一羽、ばッと羽たゝきて飛び出づる。

三

「あれ。」と吃驚して飛退り、女は少しく呆れ顏なり。
「それ、見たか。人のいふことを肯かないから吃驚したらう。はゝゝ、何、雀が巣を造つて居るんだアね。」
少年は井げたの緣に手をつきて、片手に釣瓶縄を取りたるまゝ、脊のびをして透し見たり。女も寄添ひ、
「何うしてこんな處にね。」
とおしならびて井の底を差覗き、ぢつと瞻りて二人ともうつかりしたる、耳許に高笑。

「ほゝゝ。」
またはッと顏を上げ、唯見れば何時の間に來りけむ、前邸の下婢に秋といふ氣輕者、兩手に桶をさげて据腰に立ちたるに、思はずはなじろみて横を向く、女に背きて何氣なき少年もきまりの惡さうなり。
「ほゝゝ、そんなことをなすつて在らつしやつちやあ果しがつくのぢやあございません。どれ、なかを取つて、私が水を汲んであげませう。え、あなたもまあ、先刻からぢつとして待つて居ますけれど、つまらないことをいがみあつて在らつしやるんだもの、おほゝ。」とまた笑ふ。女は少年を斜に見て、
「だから金さんに。」
「えゝ！　金さんにも何にもない。この娘はや。何うしたといふんだね。旦那様はもうさつきお出かけになるし、お嬢様も御飯が濟んだ時分だのに、まだ牛乳をお屆けでないね。可し、此秋が、口のきゝやうたゞひとつで。」と聲色。
少年は傍より、
「だがね女中さん、牛乳は何だつさ、食後にする方がいゝんださうだ。」
「あつかましい、あなたが申譯を遊ばすの……」

といひかけて女を見返り、秋はニツタリ、
「だから金さんに！」
「秋！　おぼえておいで。」
女は優しくキッと睨みて、手附の籠を取るよりはやく小走りに木戸に出でぬ。
秋は見送りつ。あをむいて井戸縄を車にかけ、
「まことに罪がございませんね。さあ、あげませう。何ういたしまして、ついでございます。あの、何の、御病氣はいかゞでいらつしやいます。」
「ありがたう、何たいしたことはないさうだけれど。」少年はいひかけて顧みれば、姉は水口の戸の蔭より此方をすかして彳みたり。
秋は見て小腰をかゞめぬ。姉さんは慇懃に、
「何うも憚りさま。恐れ入ります。」
「否、役目ですもの、何の。そしてもうお起き遊ばしても可いのでございますかい。」
「いけないんだよ、いけないんだよ。いけないッていふのに、姉様は。」
と手桶をさげて少年は走り込み、いきなり胸の處を押せば、頭重き身のふら〳〵とよろけて臺所に腰をつきぬ。

「亂暴だねえ。」
「御免よ、御免なさいよ。まだ起きちやあ惡いといふのに、困るなあ。不可よ。姉様は。」
「今朝は少しよかつたもの。」
「少しよくッたつて、たんとわるくなりや、なほ不可いぢやあないか。まだ何にもたべない癖に、姉様の方が亂暴だあ。困るぢやないか、寢ておいでよ。さあ、寢ておいでよ。」
肩に手をかけ兩手を取る、手荒きやうなが飾りなき、弟の深切に、姉は嬉しく引立てられて、
「あいよ、あいよ。」
といひながら奥の方に連れて行かれぬ。
井戸端に立つてぼんやりとながめ居たる、秋は接穂なさに立端を失ひ、
「おだいじに。」
といつたるがあてなしの獨言。

四

秋は思ひ出したやうにばた〳〵と駈け戻る。
「兄様は、お暑からう。」

と縁側に立ちて、空の色を仰ぎたるが、跫音に此方を見る、細おもての高島田、露の垂りさうな黒目がちにて口もとの愛くるしきが、すらりとしたる立姿、鼠地の縮の單衣、お太鼓結、帶上の緋縮緬の端の方少し見えて、帶どめまでキチンとかけたる、この暑いのに内に居て其躾、人がらはそれにて知らる、中尉松平龍太郎の妹にて秋にはお嬢様富子の君なり。

「秋や、せい〳〵いつて、また蛇が出たのかい。」

「いかなこツても、さう〳〵毎日のやうに出ますものか。」

「それだけれど、雀が恐がつて井戸の中に巣をする位だツて、さういふとおいひぢやないか。」

「えゝ、そりやもう眞個でございますとも。今もあなただしぬけに雀が飛出したもんですら、牛乳屋の娘がどんなにか吃驚いたしましたらう。」

「井戸端でね？」

「はい。お仙さんのお手傳をするッて、水をあげようといたしました處へでございますよ。」

富子は頷き、

「そして御病氣はどんなだね。」

「いえ、もう今朝は起きて在らつしやいました。さういたしますと、彼の弟御様が憤りまして、貴女、喧嘩をするやうにして寢かせました様子でございましたッけ。金さんも姉おもひで在らつ

しやいますのねえ。」

富子はまた頷けり。

「そりやもう。」

「あんな弟御を持つた人は仕合せでございますね。」

「あんな姉様をお持ちなすつた方も幸だよ。」

「けれどもまたお内のお兄様のやうな方も滅多にやあございませんよ。」

「あすこのお姉様のやうな方はありやあしないよ。」

秋は顏を見て、

「大そう御感心遊ばしますのね。」

「あの弟御も感心だよ。」

「えゝ、そりやもう私も感心をいたしてをります。何うしてあのお年配ぢやあ親のいふことだつて肯くもんぢやあございませんのに、まあ何でも姉様のいふことを一々はい〳〵ッて肯いて在らつしやいますが、あれであなた時々腕白をなすッちやあ叱られて、お困りなすッて、閉口して在らつしやることがございますの。其時はあの牛乳屋の女がなかへ入つちや、あやまるんでございますよ。親だつて貴女、もうものごころが着きますと、男の兒といふものは、それは〳〵女親の

いふことなんぞ、肯くことではございませんのに、ありやまあ何うしたつてんでございませう。」
「そりやお前さうぢやあないか。第一姉様が人しごとやなんかなすツて、それで消光して在らつしやるから、學資なり何なり、皆姉様のお世話ではあるし。」
「はい。」
「そればツかりぢやあ何だけれど、大そう何かがおできなすツて、夜なんざ姉様がおさらひをしておあげださうだから、信仰といふものが出て敬ふわけだし……」
「はい。」
「敬つた上に優しくツて、それでかはいがつてもらへば、秋、」
「はい。それでは何でございますね、學者で。」
「あゝ。」
「お裁縫がお上手で。」
「あゝ。」
「御深切で。」
「あゝ。」
「遊藝が琴、三味線、おたしなみがお花とお茶。」

「あゝ。」
「まるでお嬢様あなたの様でございますね。」
「あら、秋、お前は。」と口惜がる。

五

秋は飛びすさりて打笑ひ、
「いえ、まつたくでございます。何の、お仙さんなんざ、あなたは學校を御卒業なすつたぢやありませんか。」
「秋もねえ、そんなことで及ぶものかね。ちよい〳〵行つちやあお話をうかゞふと、みんなわかるよ。そして御覽なあの門札は。お書きなすつたんだがまあお手のいゝことを。ちつとも知つた顔はなさらないけれど、何でも心得て在らつしやるのよ。それで居て束髪の前垂がけで、水仕事やら、お裁縫やら、この暑いのにお前、手拭を被つてはりものをなすツて、勿體ないではないかい。」
「はい、勿體なうございます。」
「何だねえ。」

「だつて、あんまりお褒め遊ばしますもの。」
「あんまりなものかねお前、まだたりないんだよ。」
秋は恐れ入り、
「まことに申しやうがございません。お年紀ごろではあり、殿でございましたら、ねえお嬢様。」
「何の、殿でなくツたツて可いよ。」
「へい。しかしそれではちとお困りなさいますまいか。」
「何うして。」
「あの、おやすみになります時は。」
「抱かれて寢ようや。」
と笑ふ。秋は呆れ顏にて、
「へい、さうして、さうなりますと、そりや何といふものでございます。」
「夫婦さ。」
と富子は平氣なり。秋はすり寄り、
「わけもないことを、お嬢様、あなたがそれだから旦那様があゝでございます。もうお二十七ぢゃあございませんか。それで私が參りまして、もう久しいことになりますけれど、一晩うちをお

あけ遊ばしたことはなし、あんなにおかたく在らつしやつて、結構ではございますけれど、毒でございます。何うしてお身體が續きますものですか。其うちふつとお氣でもかはつて御覽遊ばせ、そりやいくらあなたがお可愛いたつて、それはまた別でございますもの、お内へなんぞお歸りになりはいたしませんよ。さうなつた日にや何う遊ばします、ちつとおひきがお遲くツても門まで出て見ておいで遊ばす貴女ではございませんか。あゝいふ内氣な旦那様ですから、口へ出してはおいら三十までだの、四十までだのとおつしやつたつて、そこはお察し遊ばして、他にかうといふ御親類はなし、あなたがお勸め遊ばして、御一方お授け申しておあげ遊ばさなけりやなりませんではございますまいか。さう申しちやあ何でございますけれど、あなたにやお分りになりませんか。何か考へごとを遊ばしては、時々うつかりしてお出で遊ばしたり、ためいきをなすつたり、何かお心の中にありさうで、そしておやせ遊ばしたではございませんか。もうちやんと私には分つてをります。そりやお品行が宜くて在らつしやいますもの。何ともお思ひ遊ばさないでも、お年紀でございますよ、爭はれぬものでございます。あのまた何處がおわるいともなしにうつ〳〵とおふさぎ遊ばすのは何よりいけませんものでございます。病氣もお嬢様、お醫者をあせるやうなのは何ともありませんが、お醫者の要りません病氣は、あなた、お氣をおつけ遊ばしませんといけません。」

富子はつく〴〵と聞きたりしが、
「秋、お前にもさう見えるかい。」
と何思ひけむ打しをれつ。頭を垂れしが思ひかへて、
「どんなのがよからうね。」
秋は熱心に膝をすゝめて、
「さればでございますよ。」
「私の思ふには。」
「はい。」とにじり寄る。
「裁縫ができて。」
「はい。」
「働く人で。」
「はい。」
「深切で。ちつと年はとつてるけれど……」
「はい。」と眼を瞻る。
「お前ではどうだらう。」

「あの……おひるは何にいたしませう。」

六

ひるすぎには又あきがらを取りにまはる、牛乳屋のお蝶、其時はなみの娘の風なり。
「今日は。」
と聲を高く懸けて、松平の勝手口より出でむとする時、女中部屋にけたゝましき跫音して、
「ちよいと、ちよいと。」と呼び留めながら、秋はばた〴〵と走り出でつ。
小戻りして、お蝶、
「用かい。」
「あゝ、ちよいと。」といひながらぢつと瞻り、
「何う見てもうつくしいね。そりや平生は申上げるまでもないけれど、あのまた朝の姿といつたら何うもいきだつちやあないね。そして顔が少しりゝしい方だから尙ほ似合ふんだもの。何うだい、豆絞りの手拭をたゝんで肩にかける氣はおありでないか。もうさうした日にや山の手の女皆ごろし、何でも此節は女同士が惚れ合ふことになつたから。」
と秋は一人合點の笑壺に入る。この洒落お蝶には分らず。なぶられて面を赤め、

「知らないわ。私。」
「そりやお前さんは分らなくツても、人が見ると美しいとさ。」
「もう〳〵〳〵澤ウ山だよ。お前さんは何時も〳〵そんなことばかりおいひだから私はいや。用は何だよ。」
「用かい。」
「早くさ。」
「何、別になしさ。急におもひだしたもんだからちよいと申上げて置かないと、また忘れると惡いと思つて。」
「人を、嫌な！」といひすてて急いで引返す、裏二階の欄干に袂をかけて、手をつきながら瞰おろしたる富子が、それと見て、
「お蝶さん。」
「はい。」と振返り仰ぐ時、脇あけをもるゝ雪の膚ちら〳〵と手をあげて小手まねき、くるりとむかうむきてつと入る、突あたりの姿見にうつくしき顏見えて、傍なる衣桁に羅かゝりたり。
「唯今。」といひながらお蝶は再び引返し、勝手口より走りあがる、ゆくてにぬつと仁王立、ふとつちようの大手を廣げて秋は大の字なりに遮り留む。小造りのお蝶が身の輕く、秋が袖の下をかいくゞりて、つと背後に出づるはしに、襷がけの脇の下を思ふさま搔ぐれば、わツとばかり手足をばた〳〵と身もだえして、十五六貫の體量、釣鐘の躍るが如く、地響をさして板敷にじたゝら踏み、竈の前によろけかゝり、手拭かけを撥ね飛ばし、棚の鍋を突き落す、ばた〳〵さわぎ。お蝶はをかしがりて嵩にかゝりて、お、こちよ〳〵〳〵と拔けつ潛りつ、潛りまはすに、秋は堪らずあぶら汗を流して拳を掴み、兩脇をすぼめて石のやうに固くなりしが、ばつたり尻餅、仰けさまにころげまはりて、丸太のやうな足二本ちやんぽんに入れちがへて空を蹴ながら、ぎやツ〳〵と血聲をあげしが、から狂、むつくり起き上ると誰も傍には居らず。魅られたやうなる眼つきをして、はツ〳〵といきをはずまし、ばたりと水瓶に縋りつきて柄杓を取る。水口より、

「こんちア伊勢屋でござい。」
「え！　畜生め！」
と秋はやう〳〵人心地。
「これは御あいさつだ。」

七

二階の居室にてひそ〳〵ばなし。

「お蝶さん、それぢやいつておくれだつたの。」
「いひましたとも。」
「よくねえ。」
「私あもう姉様にものをいふのは何だつてちつともかまひません、おつかさんにねだるやうに甘えてやるんですわ。」
富子はしみ〴〵、
「羨ましいねえ、私もそんなだといゝけれど。」
「いゝえ、そのかはり私の申すことはまぜッかへしてばかり居ていけません。ちつとも眞味になつちや聞いてくれないんですもの。悔しくッて悔しくッて、ね、お嬢様、このあひだもくひついてやりました。それですから私はお嬢様がそのしつかりしたお言ばで、漢語とかいふもので談じつけてやるのがいゝと思ひますの。」
「そんなことがお蝶さん、そんなことして腹をお立ちだと困るわね。」
お蝶はいきほひよく、
「おこッたら私が擽つてやるから可うございます。ね、さう遊ばせな。」
「でも兄様を嫌つておいで遊ばすんだから仕やうがないわね。お蝶さん、まつたくはね、はじめ

にしつかりした人を頼んで、そりやもう内の秋にだつて内證だけれど、伺つたの。さうするときつぱりお斷りなすつたんだよ。すると兄様があゝだもの。私や眞個に、たつた一人の兄さんだし、それに優しくッて在らつしやるものを、ふさぎ込んで在らつしつちやあ私あもう何うしようかと思ふんだよ。内へお歸りだと運動をしたり、笑つたり、苦勞になるほど勉强を遊ばしたのが、もう今は何だかすて身におなんなすッて、うつとりしておいでだし、御機嫌をとれば無理に情ない笑顔をなすつて、もう〳〵、お可哀相ではあり、私も心細く、何が何うなつても何うぞしてと、ほんたうに信心もして居るの。お蝶さんの口ぶりでは、思案をするとか、考へて見ておくとか、ちつとは頼みがあるやうだけれど、そりや何、お前をばお可愛がるのだから、そッけないこともおつしやらないで、串戲にしておいでのに違ひはない。一度そんなことをお耳に入れてからは、私も極が悪くッて、おせんさんの前ぢや顏もあがらないほど恥かしいけれど、あすこへ遊びに參りますといふと、其時の兄様の嬉しさうなお顏ッたら、ほんとに莞爾遊ばすから、ま、それが見たさに。私だつてお顏が見たいが精一杯で、ちよい〳〵とは參るものの、何んなにかお嫌だらうと敵の内へ行くよりはよつぽど胸が痛むわね。さうかといつて、其まゝにして置いちやあ、あの様子で兄様のお身體が案じられるもの、私やほんとに情ないよ。お母様が在らしつたらと思ふばかりでしかたもなし、人に相談も出來はせず、お蝶さん、お前にその事をいひ出すさへ、けふも

いはう、あすもいはうと、思つちやあ、いひおくれて、紙捻をよつたり、室の内をあるいて見たり、一月半も苦勞をして、やう〳〵頼んだ位だものを、推量して下さいな。」

とほろりとして差うつむく、膝に疊めるはんけちの、折目たゞしき涙なり。

お蝶もなにやら悲しくなり、片手をつきて横ずわりの疊を撫でて居たりしが、振あげたる眼をうるまし、

「ぢやあ可うござんす。一緒に參りまして、きつと談しませうよ。いまおつしやつた通り、もう一度、姉様の前でおつしやいまし、屹ときゝますわ。」

「そんないゝことが、お蝶さん。」

「いゝえ肯かなけりや私がくひついてやりますもの、ね行らつしやいよ。」

考へて、

「まあ行くにした處で、弟御が在らつしやる前で、そんなことをいへるものでなし。」とまたふさぐ。

「いゝえ、私ばかりぢやあ肯きませんでしたから、金さんにもさういつて加勢をして貰つて居ますの、ちつとも構ひません。可うござんす。」

「まあ、そんなことを弟御に。」

「なかよしですから、金さんも一緒になつてねだりますの、片腕ですわ。行らつしやい、皆でいぢめてやりませう、そして、屹と私が。」

「嬉しいことね。」

八

「おや〳〵困ること。金さんも金さんだわ。姉様が病氣なのに泊りがけによそへ行くといふことがあるものかね。」

お蝶は敵の根據地なる、長火鉢の前にぴつたり寄る、富子は大手のあたりを遠卷の姿なり。

お蝶は物指を下におき、

「おともだちが一晩がけに鎌倉をまはるツて、さそひにおいでだつたから。このあひだぢう、大さう心配さしたし、私もあんばいがよかつたから、晩にね、お前さんに泊りに來てもらふツて、さういつて、無理に出してやりました。そして何か金之助にはなしがおありか。」

お蝶は此方をみかへりて、

「ねえ、お嬢様。」

默してうつむき、富子は座蒲團の上に据ゑたるやうなり。

おせんはもてなしぶり、
「何うなさいました、大そうおあらたまりなすッたのね。」
「はい。」とばかり極のわるさう。
「おや、お蝶さん、坐り直して、さう〳〵、ちッとお見習ひ申すがいゝ。御覽な、御嬢様のお行儀のいゝことを。」
「それでは舊の通り、かうさ。」
「ほゝゝ、何もさう意地にならなくッても可いよ。」
お蝶はまた坐り直して、
「そんならかうさ。も、じれつたいね。」
「誰も知つたことではないわね。」
お蝶はくやしさうな眼つきをして、
「姉さんてばじれつたい！　あの……大抵分りさうなものだねえ。」
「何がさ。」
「後生だからといふことさあ。」
と身を斜にして口のあたりに兩手で茶臺を捻つて居る。

「まあ、いつて御覽な。」
「それではいふがね、きつと肯いておくれかい。」
おせんは輕く、
「きくともさ。」
「え、そんならいゝけれど、もし肯いておくれでないと、お嬢様は學問がおあンなさるから、そんなことをしちやあいけないッておつしやるけれど、私はくやしいから、身を投げて、お前に取ついてやらうと思ふんだが、いゝかい。」
「も、恐いことね。」と打微笑む。
「あら、笑ひごッちやあなくッて、眞劍だよ。命を助けると思つてきいておくんなね。」
「そりや隨分。」
「それで、お殺しか、活しておくれか、どつちだか、きつとした處をいつておくれな。」
といひかけたる頰のあたりに血の色さしつ。富子は胸を躍らしぬ。
「姉様、お嬢さんのうちへいらつしやいな。」
とお蝶は氣を籠めて屹といふ。
おせんは二ツ返事で、

「あゝ、あがりませうとも。」
と意外な挨拶。お蝶は氣を利かしてふいと立ち、直におせんの袖を引きて、
「さあ、お嬢樣、さあ、引張つて連れて參りませう。」と勢込む。富子はためらひて立ちかねしが、お蝶の勢に引入れられて、思はず座を立ち、ものも得いはで、おせんの片手をソと取りつ。
「さあ、おいでよ。」
つと引立てたるお蝶の力に、よろ〳〵と座をすべりて、おせんは「あれ。」と片膝立てつ。單衣の上に羽織りたる半纏するりと肩を辷りて、お蝶が引いたる左の袖口びり〳〵と裂けたるに、おや！　と手を放つ。富子の顏を、きッと見て、おせんは、聲すゞしく、
「いけません。」
富子ははッといつたきり、身を震はして泣き臥したり。おせんは半纏をしづかに脫ぐ。

九

氣象もののお蝶は眉を動かし、キッとおせんを睨みながら、富子の背に縋りついて、
「お嬢樣、堪忍遊ばせ、よ、よ、口惜うございますかえ。私だつて口惜いわ。も、もう、歸りませう歸りませう、何の、こんな邪險な人に、何の、さあ、歸りませう。」

と、搖り動かせど正體なし。おせんはうつむきてものもいはず。
背戸越に、秋の聲、
「お嬢樣、旦那樣がお歸りになりました。」
お蝶はまたうながして、
「ね、呼んでますからお歸り遊ばせ。さあよ、さあ、」と手を取れば力なく顏をあげて、おせんの顏をぢつと見ながら、
「御堪忍遊ばして……」
といひかけて咽せ返り、袖を嚙みしめてまた泣伏す。お蝶も泣聲、
「何の、誰があやまるもんか。そ、そんな邪險な人あ、姉樣でもなんでもないや、もう〳〵〳〵誰がまたこんな家へ來るものか。もう來てやらないからいゝ。もう泊りになんぞきてやるもんかよ、さあお嬢樣。」
と背を推し出し〳〵て、後を屹と振返り、
「もう來ちやあやらないや。」
と振顧つたる眼に涙一ぱい、富子も兩袖を打重ねて、泣きはらしたる眼を蔽ひ、しを〳〵として出で去りぬ。

おせんは二人を見送りて、思はずほッといきをつきしが、アと前にのめり伏し手早く半纏を引まるげて、鳩尾の處へあて、物指を取つてぐッとおして、肩を震はして惱みたるが、やゝありて落着きけむ、蒼ざめたる顏をあげて、

「モ煩ッて居るものを。」

としみ〴〵と獨言、また力なげに首垂れたるまゝ、ぢつと沈みゆく物おもひ。あたりのものたそがれて、秋はまだ初ながら、陰々として暮れかゝる、蠅帳茶棚のうら暗く、障子ほのかになりにけり。折から裏の井戸を汲むカラ〳〵と冴えたる車の音、おせんはふつと面をあげて、天井を仰ぎ見たる眉宇幽に微笑を含みて、

「あゝまゝよ。」

物指とともに投出す一言、身を斜めに蠅帳の網戸をあけて、德利を取出し、湯呑にあけて冷酒の一あふり、急に立つたる眼くるめきて、よろ〳〵とよろけかゝる障子にばつたり身を支へし其まゝ一枚左へあけて、緣側に立出でつ。おせんは庭下駄を引かけしが、ばつたり緣の端に腰をつきて、沓脫石に爪先を打揃へ、片手をつきて身を反し、森の梢の二日月の白う澄みたるを仰ぎながら、鬢のもつれを搔きあげたる、足許にものの氣はひ、薄暗がりの霤より手ごろの石の動き出づる、蟇の大なるが、のさ〳〵と石の上につくばひて、まじ〳〵と空嘯く。おせんはうつくし

き踵をうかして、細き爪さきに庭下駄をばぶらさぐるやうにしながら、片あしをひらきたれば、下かいの褄はらりと解けて蟇の背をソと踏まへつ。凄艶なる眼の中さえて、面やせたる頰さみしく、口許のしまれるゆるみ、ぢつとひきがへるを見て、

「氣樂だねえ。」

トタンに門の戸を、がらりとあけて、

「せん。」と一聲呼ぶものあり。

十

「は。」とおせんは飛立つやう、急ぎあがりがまちに出迎ふる沓脫の處に肅として立ちたるは、額廣く鼻高く頰の肉少しくやせたる、一個氣高き人物なり。手をつかへたるおせんを見ながら、袖の下より拳を出だして、無言のまゝ差つくるを、唯見れば一條の蛇なり。

おせんは頭を傾けて、瞳を斜に視めしが、手革鞄にても受取るやう、自若とし手を出しつ。來客の手より渡されたる蛇はおせんの手首より二の腕にかけて二卷ばかりうねりを吳れてまとひつき、袖にからみて、高く其鎌首を擡げたり。

おせんは心にも留めざる狀にて、其まゝ左の手に客が脫いで出せる帽子を受取り、あとに續き

て座敷に入りつ。
「もし、お土産でございますか。」
客はハヤくつろぎて坐したるが、此時おせんの腕を見て、
「む、卷きついたか、其は惡かつた。」
「はい、それではお土産ぢやあございませんでしたか。」と靜に問ふ。
客は何氣なく、
「そんな大きな奴に土産があるか、小兒ぢやな、はゝゝゝ。」
と高く笑ひしが、急に眉を顰めて、
「取れんか、うむ。」
「左樣ならば。」といひながら、おせんは衝と座を立ちて緣側に立出でつ。尾のさきをはさみたる指を放てば、するりとのびて、蛇はずる〳〵と這ひおりて、其まゝ叢を潛りて見えずなりぬ。
おせんは見向もせで座に返り、
「何處で持つて入らつしやいました。おいたでございますね。」
「惡戲なもんか。彼はな、私處の庭に居た奴ぢや。」
「え、それではお邸からお持ち遊ばして。」

「む、其の、何うも內の奴は皆恐がりをつて寄り付かん。書生までが蛇といふと大騷ぎをやるンぢや。さつき出て來る時背戸を通ると、あいつが何ぢやよ、樹の股にぶらさがりをつて、須磨が恐がつてならんから、打ちやらうと思つて提げて出たがの、往來は人通があつて棄てられん、驚かしては氣の毒ぢやと思うて、川へなと思ふと、つい橋の際に舟がもやうて居る。溝へなと思ふと、軒下に小兒が遊んで居るぢや。何處へも棄てられんからつかんだまゝうつかり持つて來たがの、ヤ、面倒であつた。私にはちつとも卷きつかんぢやつたが、恰好が惡いで不氣味なもんぢやに、氣の毒であつた。なにが居ると好かつたに、金之助は何處にか行つたか。」
「はい、あの鎌倉へ一晩泊りにさそはれて參りました。」
「む、暢氣で羨ましいな。」
「嘸、ご用多で。」
「うるさうていかん。せん、久しぶりぢや、飲まんか。」
「はい、六疊でお休み遊ばしまし。支度を致します。」
「さうしような。」
と立ちあがる肩聳えて胸ひろく、あたりを拂ふ風采の悠然と奥へ行く、後姿を見送りて、おせんはうつかりと彳みつゝ石に化して立つたりしが、はッと心着きて、

「おや！　暗くなつた。」
奥にて快濶なる音調高く、
「おい洋燈をよこせ、ともしてやらう。」

十一

おせんは手燭して勝手に出で、金盥に水を汲み、石鹸を揉みながら蛇のまとひたる左の手を洗ひかけつ。人の佇める氣勢あり。
心着けば、すゝり泣の聲もするにぞ、ふと其方をみしが、思ひあたりけむ、手をのべて、靜に戸障子を引きあけつ。果せるかな人影のソと物蔭にかくるゝを、それと見て、立ちておもてを覗き、
「お蝶さん。」
と低聲に呼ぶ。お蝶は顏をかくしながら、ものもいはで忍び音に泣き居たり。
「何うしたのだね、お蝶さん。」
と優しくいへど答もせず、
「そんなに腹を立つものではないよ、もう堪忍おし。」とおせんはやさしくソと其肩に手をかくる

や否や、お蝶はわッと泣きて駈け出すにぞ、庭ばきを引かくるより早く、つと追ひて、井戸端にて引留め、矢庭にかゝへあげて走りもどり、勝手の板敷に腰をかけて、膝の上へ横だきにいだきつゝ顏をかくしたるお蝶の頰に、ちかぐと口をつけて、
「もう、堪忍おしよ、ね、お蝶さん。」
と帶のあたりをしめつくれば、鳩尾へ顏をふせて、おせんの項にすがりつき、
「私、私や身をなげようと思つて。」
と聲を震はすお蝶の背の汗ばみたるを撫で擦り、
「何うしたといふのだね、もうわけもないことをいふぢやあないか。」
「だつて、お嬢樣が可哀相だもの、私、可哀相でならないもの。姉樣がひどいんだもの。」とうるみ聲なり。
「それだつたッて、お蝶さん、お前が何も騷ぐことはないぢやあないかね。」
「いゝえ、私やお嬢樣にさういつたわ。姉樣が肯いてくれなきや、私、身を投げるッて、約束をしたんだものを。それにもう姉樣のうちへ來ることが出來なくなつたから、私や悲しいんだからそれで、あの……」
「死ぬ氣におなりか。」

「あゝ。」といひながら指のさきにて、おせんが襟の模様をつゝく。

おせんはぢつと抱きしめて、

「も、も、お前といふものはまことにつまらないものではないか。誰が來ちやあ惡いといつたえ。」

「そりやなにもお前はさうおいひぢやあなかつたけれど、あんな惡體をいつて、來ないといつたから、もう寄せちやあおくれでないと思つて、私や、何の、あんな、お嬢さまをお泣かせの、邪險な人の處へ誰が來るもンかとさう思つたけれど、何故だか急に逢ひたくツて、それでも行かれないと思つたら、情なくなつて、あやまらうと思つて、そツと裏まで來たんだけれども、お前がお入りとおいひでないから私や泣いてたんだよ。」

「何のかまはないでお入りならいゝのにさ。」

「それでも、ね、さうするとあやまらなきやあならないからさ。」

「そりや隨分おあやまりなさるが可いね。」

とニツコリ、お蝶もニツコリして、

「だつて、口惜いわ。」

「ま、身勝手ッちあない。」

十二

お蝶は涙の顏はれて、眉あざやかに、茜さす眼を細めて、おせんの顏を、うつとりと見たるまま、ものをもいはで居たりしが、

「姉さんえ。」

「あいよ。」

「あの、やつぱり姉樣だよ。」

「あゝ、お蝶さん。」

お蝶は嬉しげに頷きしが顏見合せてものいはず、やゝありてまた、

「姉さんえ。」

「あいよ。」

「私をばあのウ可愛がつておくんなね。」

「あゝ、お蝶さん。」

お蝶はなつかしげにつくゞおせんの顏を瞻りて、また言途絶えたり。しばしありて、

「姉さんえ。」

「あいよ。」
「こんどの縁日には屹度かい。」
「あゝ、いゝとも。」
おせんは思はず聲くもりぬ。お蝶は何の氣もつかで、
「それではねえ、姉さん。」
「まだあるかい。いろんな御註文があるのね。慾が深いんだね。」
「ほゝゝ、だつて、今いふと何でも肯いておくれのやうな顏色をしてるものを。」
「蟲がいゝよ。」
「ねえ、姉さん。」
「あいよ。」
「あのね、後生だから。」
「むゝ。」
「お邸のお嬢さんにも姉様になつてあげておくんな、何んなにか私をば羨がつて居るだらう。ええ、姉さん、可哀相だよ。よう、私にさういつちやあお泣きだから、私やもうしみ〴〵可哀相なの。而してね、やつぱり兩親ともおありでないよ。」

といひかけてまたほろりとする、おせんも聲を沈ましたり。
「お蝶さん、みんな分つて居るよ。みんな知つて居るけれどね、さうはいかない譯があつて、そればかりはお蝶さん、何うしてもお前の喜ぶ顏が見られまいかと思ふがね、まあ、お待ち。ほんたうに考へて、其内に返事をきかせようから、お嬢さんにもさう申上げてね、まあ大人しくして待つんだよ。可いかい、お前はせツかちで氣がはやいから私やもうさつきからどんなに心配をして居たか知れないよ。さういふんぢやないけれど、たいてい苦勞をして居るから、もうそんなに心配をさしておくれでない。ね、分つたかい。」
お蝶はすゝり泣きに泣きながら幾度も打うなづく。
「さあ、そんなら、機嫌を直して内へお歸り、おそくなると惡いだらう。」
「あい、もういつまでもかうして居たいねえ。」
「ほゝゝ、あつかましいこと。さあ〴〵、大きなあかんぼで重くツてなりやしない。それさ、またきものが裂けるわね。え、また抱いて寢てやらうや。いまお客があるんだから。」
お蝶はやう〳〵手を放して、
「はあ、何誰。」
「駿河臺の伯父さんだよ。」

「おや、さう。お珍しいね。」
「いつて御覽、そしてまた天窓を撫でられたらお困りだらう。」
「髮なんざあいゝよ、ちよいと。」
といひながらばた〳〵と走り入る。
「あゝれ、そつとして。そつとして。」
すぐに拔あしにてお蝶は戻れり。
「姉さん、寢んでいらつしやるよ。」
「おや、さう、お靜だと思つたら。」

十三

「もし、もし。」と呼び起す、客は床の間を枕にして心安げに眠りたり。おせんは杯盤を片寄せて、洋燈臺をわきへずらし、枕に小搔卷引きつけて、そばへより、
「もし、もし。」と心づくる。
「む。」といひながら靜に眼をあけて顏を見る時、左の腕を肩よりまはして、右手に枕を持ちながら、

「あの、お頭が痛みます。」
とさしいれて項にまはし、ソと其頭をもたげたる、客は半ばさめ心地の、何とかしけむ、眉を顰めて、ハタとおせんの手を拂ひ退けつ。
はツと枕を取落す、おせんが顏の色かはりぬ。
客は寢返りして、此方を見向き、
「そツちの手をかせ。」と何氣なし。
おせんは兩手を膝に正して、肩を少しふるはせながら、激したる音調もて、
「嫌でございます。」
客は少しも心に留めず、
「ぢや、その枕にしようか。」
「御勝手になさいまし。」
おせんは顏を背面けたり。客は起直りて、
「はゝゝ、可い、私ももう起るンぢや。」
と極めて無頓着。おせんはうつむきしが面を正しぬ。
「あの、お隙を頂きたうございます。」

とくひしむる、かはりし素振を、さとれる色なく、
「む、何處かへゆくか。」
「はい。」とうるみ聲。
「何ちつとも構はん、私も歸らんければならん。」
いふより無雜作に身支度する、夜は十時を過ぎたり。おせんは疊に片手をつき、うつむきたるまゝ無言なり。客はつか〳〵と立出づる、おほまたの跫音に、おせんは思はず踵を浮して、膝を折つて身を立てつ。
蒼くなりしがする〳〵と走り寄り、袖に縋らむとせし、身を退りて、
「御前。」
「何。」
おせんは唾をのみ、
「松平といふ中尉さんを、御存じで在らつしやいますか。御前。」
「むゝ、知つてる、何うした。」
「私を、あの、妻にしたいと申します。」
客はから〳〵と打笑ひ、

「ハ、、贅澤なことをいふの。おもしろい。驕つた奴ぢや。さうか。」
「何ういたしましたものでございませう、御前。」
「それは斷れ。」
「はい。」とまたさしうつむく。客は次の室にまたぎいでたり。
おせんはふるへながら、
「ですけれども。」
「おウ。」
「ですけれども、あの肯きませんかッたら。」
客はまた笑ひ、
「ハ、、雜作はない。私の——相良中將の內室ぢやといへ。」
「はい。」
「何うしたか。」
「それでも肯きません時は。」
「せん、何と思ふ。」
おせんは胸をかゝへしめて、倒れふして、わッと泣きぬ。

「お隙を下さいまし、御前。」

十四

「御免なさいまし、御免なさいまし。」

と忍音の富子は、勝手口の戸障子に身を寄せて、耳を澄せば寂としたり。少し離れてあたりを見まはし、また立寄りて音低く、

「ちよいとおあけ遊ばして、何卒、ちよいとおあけ遊ばして。」

内は舊の如く靜なり。默して富子は立ち盡しつ。椎の葉、杉の枝きら〳〵と夜露に光りて、月高く天晴れたり。叢には蟲の聲々、鐘の音に細り行く、山の手の夜は更けぬ。

堪へかねて叩く戸、四邊をはゞかる胸轟き、

「何卒、何卒、後生でございますから、ちよいとおあけなすッて、姉様、モ嘸お煩うございませうけれど、もう一度申したいことがあつて參りました。さう申しては濟みませんけど、さつきから伺ひますと、まだお休みにはならないやうす、こんなに申してもお聞えはなさいませんか、えゝ、お心強い、姉様。」

と富子は忍びて泣きながら、

「ちつとはお察し遊ばして、何うぞもう一度お顏を見せて下さいまし。さつきのお腹立ちは存じてをります。何うしておかどへも參られましたわけではございませんけれど、私が推しつけがましい失禮なことを仕出しまして、それでお腹立ち遊ばしたんでは、モあれだけに思つて居ます兄さんにも濟みませんが、私ももう一度申したいことがございますから、何うぞお逢ひ遊ばして下さいまし、おせん様——姉様。」

とぴッたり身を寄せ縋りつきて、戸障子に顏をおしあてつ。

「まだ叶へちやあ下さいませんか。恩に被せようではございませんが、あなたのたんとお鹽梅の惡かつた此あひだうち、お内には弟御様ばかりなり、何んな御用があらうかと、お夜伽をいたす心で、お門に立つて居りましたのは、今晩ばかりでございますか。」

といひかけて、また二ッ三ッ戸を叩き、顏をなゝめに耳をあてて聞澄せど物音なし。

富子は仰ぎて月を見つ。森の中に烏鳴けり。

「あゝ、私といふものは。」

ためいきつきて首を垂れぬ。町のはてに跫音して、さつ〳〵と此方に近づき、おせんが門口に立ちとゞまる、鈴の音は早出の新聞配達、裏口にひッたり人影は、とすかし見るや、心咎めてうかうかと立はなれ、井戸端にありくとき、跫音はまた走り出だして四辻のあたりに遠のきぬ。

富子は井戸ながしに彳みつ。森の梢に白雲おこりて、むら〳〵と廣がりて、其末かすれ〳〵になりて月の面に薄くかゝり、斜に下町の空にわたる。鐘はまた聞えたり。

きつとなりしがくづほれて、投ぐるが如く身を横に、肩をすぼめてしよんぼりと、井げたに兩の手をつきて、ぢつとばかりに見入りたる、高臺の井戸深く、靜さかぎりなかりしが、すゞしき風颯と吹きて、車にあげたる釣瓶の緣より一雫音冴えて井の底深くさら〳〵と水の響、チ、チ、チと雀の囀る聲に、はツと心着きて一足退く、トタンにどん〳〵と太鼓きこえて、しら〳〵と立つ霧の中に、富子の姿を籠めたる折から、松平の勝手をあけて、秋は大あくびしてぬつと出る。

十五

「畜生め、何うするもんか、うんとひとつくらはさう。ほんとに忌々しいッちやあない。死なぬほどの酷いめにあはせやがつて、おのれと思つてもお嬢樣の袖の下にかくれて居るんだもの、手出しは出來ず、口惜くッて、口惜くッて、それにゆうべはまた旦那が魔されつゞけで、寢られやしなんだ。どれ、」

お蝶に仕かへしの待伏せ支度、秋が扮裝の事々しさよ。むかう顱卷の裙からげ、薪ひとつ引提げて、わが門にては妨あらむと、庭を横ぎり木戸を出でて、おせんが裏口に立ちかゝる。

朝霧のしら〳〵あけにうつくしきものちら〳〵と中形の浴衣白きいろあざやかに、すらりと立つたる井戸端のお嬢樣、

「秋かい」

と聲をかくるにぎよつとして、

「おや！」とばかり拍子拔け、寢衣を其まゝ紐ばかり取亂したるありさまなり。富子はものを氣取られまじと、わざと先を越して、

「お前何うしたといふのだね、其は、」

と見咎むる、薪を手の裡に捻りまはして、

「へい、寢惚けましたのでございますか不知。」

「何うだかさ。」

「あ！　その何でございましたよ。蛇が出ましたら追つてやらうと存じまして……」

「さうかい。」と深くも問はず。

秋はじろ〳〵と富子を見まはし。

「お嬢樣はまたお早いではございませんか、そしていつの間に、あのこゝへ。」

富子は解きかゝりたる緋の扱の片端少しだれたるに、裙をや結へむ膝をや括らむと思ひし其か

と、はツと胸塞がり手早く帶のなかにおしいれつゝ、さりげなく微笑みたり。
「あんまり朝顏がよかつたのでツイ。」
「なるほど、きれいですこと。」
と垣を見たる、むかうより、お蝶は印半纏の足輕く、雪踏チヤラ〳〵と走り入る、顏の色の白きに過ぎて、何ならむやつれしは、寢不足をしたりしや、牛乳の籠をさげたる片手に、紫と紅と絞とのみだれ咲いたる朝顏のつる二ツばかりわがねて持ちしが、見るとハヤ莞爾して、
「お早う。」と愛想よし。
秋は接穗なさに無言なり。富子もあゆみ迎へて、
「おや、きれいだね。」
「えゝ、あの姉樣にあげようと思つて、持つて來ました。ちよいと、」
といひながら氣のせく振、おせんの勝手口に走り寄りて、
「姉さん、姉さん。」と呼べど答なし。
富子は此方より、
「まだお眼ざめではなからうよ。」
「いゝえ、いつも早起をおしだのに、ふウ、」

と濟まぬ顏、りゝしき眉を顰めたり。
「だツて、まだはやいもの。」
「でも何だかゆうべ氣がすまないことがあつたんですもの。妙だよ——姉さん——姉さんちよいとお蝶が來たよ——姉さん——あら。」
戸を引けば鎖してあかず、お蝶は急き込み、
「ちよいと、あの、お孃樣、そツと持つてて下さいな。」と、朝顏を富子に持たして、戸障子に兩手をかけぬ。
富子も何か胸躍り、
「あくかい。」
「何、もうわけなしにあきます戸ですのに、何うしたんだらう、まあ。」
と力を籠めて引動かせば、バツたりものの落つる音して、少しあいたる戸口をもれて、面うつばかり懷しき香の薫りぞ高かりける。

十六

明治二十八年——月——日、滿洲雪暗き戰に三軍吶喊の折なりき。

土人の茅屋を小楯に取りて一隊を率ゐつゝ、陣頭に剣を抜いたる、年若き士官のみ、各隊みな既に敵壘近く砲烟の漲るなかに乗入りたるにもかゝはらず、冷然として立つたれば、あはれ彈丸の恐しさに立竦みになりけるよと、爪はじきせる人ありし。

脱兎の如く躍り出でて三反ばかり歩を進め、あたりを屹とみまはして其手の兵士を顧みるより、空高く剣を揮りて、

「進め！」

おッと鬨の聲、軍馬一團潮をあげて颯と間近に進むと見れば、

「伏せよ！」と一聲叫びたり。一隊直ちに剣を伏せぬ。伏したる處墻壁あり。

少年士官は其身のみ亭として突立ちつ、雨、霰と降しきる彈丸におもてもふらず、しばし敵壘を見詰めしが、再び單身殺進し電の如く眼をくばりて、

「進め！」

おッとときの聲、ひた〳〵と寄せ來るを、おのが背後に引きつけて、

「伏せよ！」

と更に令したり。一隊言下に横はりぬ。士官は屹と立つたるまゝ身うごきもせでたゞ一人剣を横へて嘯きしが、韋駄天の如く颯とかけて、ふりかへりざま、切尖を、天に磨しつゝさしまねけ

り。

「進め！」

おッとときの聲、疾風一陣つと進みて、唯ある墻壁に達するトタン、

「伏せよ。」

と高く呼はりたり。一隊三たび姿を消しぬ。士官は直ちに歩を進めて遠ざかること五十間、砲聲、銃聲、轟々と天地を渦く一しきり吹雪のいきほひすさまじく、暗うなりたる廣野のなかを、一文字に横ぎりて、矢玉のなかをくゞり抜けつゝ、一騎打つたる傳令使。

士官間近に駒を進めて、つゝとばかり乗り戻し、鞍壺に肅然と、

「中將相良師團長より……傳令！」

駒の頭を立直して、「中尉、貴官の姓名は？」

と朗かに呼はりたる、聲に應じて剣を捧げ、士官はおのが名をいへり。

「松平龍太郎。」

「む、（見事）と申せぢや。」

爾時、剣光閃きぬ。

「進め！」

おう〳〵とときの聲。

引つけては兵を伏せ、矢頃を見てはまた進め、唯一人身をぬきんでつゝ、矢表に機を計り三度、四度、五度、六度。されば敵彈に射竦められず、部下の士一人かすりでうけたるものもあらでひツたり寄せたる敵壘にやす〳〵と乘り入つたる。軍めでたく果せたりし、夜に入りて、相良中將、置酒して諸將を勞ひつ。

杯一巡、中尉其前に進みし時、將軍肩を拍つて、微笑して、

「好男子、報いずばなるまい。何か？」

誰がためにかすべき、國家に責任を荷へる身の、渠とともに其時死することを得ざりし中尉は、愁然として、

「自殺、閣下。」とのみいふ。

廣き額纔にひそみて、暗雲一帶、星光の爛たる眼をかすめしが、うつくしきはんけちに、ビールの瓶を持ちそへて、莞爾として、

「飲むさ。飲むさ。」

X 蟷螂鰒鐵道

一

持主なりし人の名なるべし。裏にならべて稍斜に、H、H、H、と三字書いたり。幾度か繰返して愛讀せる其眼には觸れたりけむ。假綴の繼絲斷々になりて、表紙は纔に其一部を殘して、辛うじて着きたるのみ。

手荒く取扱ひしものにはあらず、持主の鄭重なる、西洋紙の薄き表紙に、厚き西の内以て兩面に蔽かけたるが、持古したればならむ、煤けて薄黑くなりたり。

Xと題したる此小説の題字をば、其蔽の紙をすかして、原の書體に違はざるやう、上より袋字に寫し取りて、おなじくXと書きて、また其上に金の箔彩りつ。下に小さく(完)とぞ記したる。

著者、秀蘭、畠山須賀子は、掌に乘せてつくゞと見たりしが、顏をあげて、山科の家の内室と眼を合せぬ。

二

山科の主婦は身體痩せたり。瞳清しく、客に向ひて、ものいひいづる聲沈みぬ。

「お須賀さん、御覽の通り、何のお愛想もなし、お構ひ申すことも出來ませんが、貴女、其が何よりでせう。大層大事にして持つて居たと見えますね。風説も聞いて居ますが、私も拜見して面白う思ひました。めッきり旨くなつたのね。」

お須賀は少しく顏を赧らめ、

「も、お恥かしいんですよ。あなたの前ぢやあ冷汗が出ますもの。可いもわるいも何うせ學校に居ました時分は、あなたにお作文を直して戴いたんですものね。御覽で、恐入ります。其上、あの、何うも濟みません、つい何だものですから、貴女お怒り遊ばしはしまいかと思つて、もう小さくなつて參つたんです。」

「いゝえ、結構。私のことを忘れないでまあ、よく書いて下さいました。しかしお須賀さん。」

此聲力籠りたれば、客なる女作家は俯向きたり。

「長屋も長屋、こんな邊鄙な處の、路地の奥で、御覽の通り八疊一室で、貴女には、見えも外聞もござんせぬが、火鉢一ッ無いでせう。ま、手桶も不自由といふので、お客樣にお茶をあげますにも、この口の缺けた土瓶を持つて、私が井戸端へ行つて、大きな釣瓶から小さな口へあけるので、溢して、まあ、だらしのない。裾も何もびつしよりになつて、それをば着換へるものもあり

ませんから、この體で、濕つぽい、かび臭い、疊に坐つて、氣味の惡い、踵を浮かしてさ、そしてあなたとお話をする。ね、この口でいつちや、をかしうございますが、ま、貴女御存じだから言ふやうなものの、そりや私は書も讀みました、字も習ひました、人形の首ならば繪も書きます、佛蘭西語も眞似ならばしますが、其が何の役に立ちますもんですか。つまりいへば、貴女は、些とはものも知つてる女が、土方や何ぞの妻になつちやあ、氣の毒だ、可哀相だ、つまらないと、いふやうにお思ひなすつて、可ございますか。それで、この、Xもお書きなすつたやうなものですけれど、其はね、お机に對つて、空な家政學でも讀んでる時の考へですよ。

かうなつてはね、せめて長屋なみのおかみさんづきあひでも出來る方が、いくら可いか知れません。毎朝御飯を焚くてツちやあ、良人のに手傳をして貰ふやうでは、ほんとに仕方がないんですもの。衣物だつて、たちおろしの絹ものばかり手に懸けてても、つぎはぎが出來ないぢやあ困るんですよ、お須賀さん。

甲斐性のないことといつたら、良人にもぼろをさげさしときや、我身でも釘裂をひつぱつて、何んなに見つとも無いか分りません。

書が讀めたつて、お客樣の名刺一ツ讀まうでなし、字が書けたつて、あなた、二年にも、三年にも、お朋達の處へ年頭狀一枚書いて出せないやうな身になつては、何にもなりやしないんです

から、私や却つて良人のに恥かしくツて、氣の毒でなりません。力がありや荷車の後押でもしますがね。働がありや內職でもして、お菜だけなりと稼ぎ出したら、良人も何んなに都合が可いか知れませんのに、何うでせう。不規則な食物を頂けば胃が惡くなる、元結でも捩らうと思へば、れうまちに障りますね、寒けりや、寒いで、風邪は引くんだし、氣候が惡ければ腦がいけないツて、いつたやうな、こんな、厄雜な、病身な、甲斐性なしの、なまけものを、土方の內に置いて何うなりませう。ほんたうに氣の毒でなりません。其に惡い顏一ツ見せないで、優しくして、可愛がつてくれますもの。土方だつて、何だつて、私にや過ぎものの良人ですよ。

あんな學問なんかしなかつたら、些少は氣樂に暮せませうのに、なまじつかの其が邪魔になつて、時々は堪らなく、キ、キと胸へ何だか込上げるの。なりたけもう忘れてしまひたいと思つてね、傍にや紙の片も置かないやうにして居るもんですから、此節ではね、それでもやう〳〵もう餘程何か忘れてしまつて、お須賀さん、見たつて、あなた一寸見たつて分るでせう。大分鈍なものになりましたよ。」

女作家は悄然として俯向きたるまゝものいはず。主婦は音の調の變れるにもかゝはらず、さりげなう裝へり。

「ですから、あんなことも出來たものです。あなた、弟御樣が何かおつしやりはしませんか。い

えね、何も他ではないんですが、此間、古本屋の店であなたの弟御様に、このXを戴いた時ですよ。夜分ぢや、ありましたけれども、つい、何なの、お須賀さん、燒芋を買ひに入つたんです。小兒を負つてさ、この書を片手に持つてね、可いぢやありませんか。おほゝ、何にも私は知らないで居ましたけれど、お聞き申しますやうでは、弟御様が見て在らつしやつたかも知れませんのね、ちつと恥かしいやうです。まだ娑婆ッ氣が取れません。」

と淋しき笑顏したりき。淋しき笑顏なりき。原より愛嬌には乏しき人の、眉はりゝしげなれど、口はしまりたれど、色はいと白けれど、氣高くは見ゆれども、太くやつれたる人の笑顏ぞ淋しかりける。

三

「實に濟みませんでした。も、何うしたら可うございませう。私がもう些と分別がございますと、斯うして、今日だつて然うなんです、參られたわけぢやあござんせんけれど、つい、あの弟がね、富坂上の古本屋だとかいひましたつけ、この書を見つけまして、斯う言ふ風に讀んであつたもんですから、何うでせう、私に一ッ喜ばせようと思つて買つた時に、丁どまた、貴女が行らしつて、店へお立ち遊ばしたんですとね。あの兒も、些ともあなたを存じちやあ居ませんでございました

でせうけれど、Xといふ小説はッて、あなたがおつしやつたのを、聞きましたさうで、おや、と立留まりましたさうでした。

さうすると、斯う、あちこち御覽遊ばしながら、さつき行きがけに、一寸見て置いたんだが、此店にXといふ小説本があつたつけ。ちつと借りたいが、何うしたんだえ？　と、ま、失禮ながら打明けて申しませう。なりにはお似合ひ遊ばさない、しつかりしたお言だし、お人品もお人品なり、其に彼の兒も姉の書いた、小説……といふんですか、まあ、其ことをお聞き遊ばしたもんですから、何うも默つて居られなかつたさうで、差出て、買つたのをお貸し申しましたさうですが、つい、お所もうかゞはないで、其ッ切。あの、何ですよ。えゝ、其も、其お買物を遊ばしたのも、お見受け申して居ましたさうですが、無暗と喜んで歸つて來ましてね、そして其話をしますから、ふと其何でしたの。お姿なり、お言つきなり、何うも、あなたでおあんなさるやうに察れましたので、もしやと思つて古本屋で、あと、四五日も後でしたッけか、弟に聞かせましたら、あゝ、ちよい〳〵本をお借り遊ばす、あの方ならばッて、いつてきかした、お名前が、貴女でせう。

直ぐ出懸けまして、お宅を伺づたら、つい二三日前こッちの新井の方へお引越し遊ばしたつて、さういふもんですから、お目には懸りたし、お詫も申したし、始終ね、恁う申しては何ですけれ

ど、あゝ、學校では山科さんといふと上下響いたものだのに、あんなにおなんなすつてから、何う遊ばして在らつしやるだらう、とね、なかの惡かつた、つまらない方が、皆、馬車やら、人力やらで、やれ、花、それ、月とおもしろく世中を送つて居るのを見ます度にね、私は口惜くツて堪りませんで、何の詰らない。束ね髪の前垂がけで構ふものか。山科さんを引張り出して、日本橋の上へ立たしたら、小さくなつて河岸の軒下を通らうのにと、さう思はない日といつちやあなかつたもんですから、つい、あんないたづら書もしました譯だし、お目にかゝつたら、またお机に縋りついて、詩集のお談でも伺はうと、實はね、あなた思ひこんで居ましたが。」

言ひかけて、ぢつと見て、

「大層貴女かはりましたねえ。」

あるじは膝を正したり。須賀子も襟を搔合せつ。

「汽車を下りると、田圃道で、最う方角も何も分りませんので、道を聞いてお顏を見ると、其が貴女だつたのには吃驚しました。お小さいのをお抱きなすつて、草履穿で、地藏樣の前にお立ち遊ばして在らつしやつた、あの、お姿にはほんたうに泣きました。私、ぼんやりしてしまひました。

けれども唯今のお話を承りますと、申しやうのない思召で、さういふ貴女のお心では、あなたが、何ぞ不平なやうなお言でもありましたら、却つてお宥め申しませんければなりませんやうになりましたね。

そりや、お兩親はおいでぢやあなし、お小さい時分から、伯父さんにお育てられなさいます、其御親類のお計らひで、唯今の旦那樣に、何もおつしやらずにおかたづき遊ばしたが、全く伯父さんだつて、こんなことに成らうとは思し召さないで、ま、其時分は立派にお暮しなすつた方へ、お世話なさいましたわけですから、其をお怨みなさいますと言ふわけにはゆかず、一旦おかたづきなすつた上は、旦那樣のことですもの。譬へ何んな落目におなり遊ばさうと、兎や角、あなたがおつしやるわけのものではなし、そりや何處までもお從ひ遊ばさなければなりません。つまりあなたのお身體を旦那樣のものとして、そしてまあ、かうやつて、お暮し遊ばして在らつしやれば、なるほど、學問を遊ばしたのが、お邪魔になるでございませう。源氏をお聞き遊ばしたのも、英文をお綴り遊ばすことも、書のお見事なのも、佛蘭西のお出來なさいますのも、何んなにか、お邪魔になるでせう。……あなた。」

あるじは顏の色かはりぬ。唇をぱふるはせつゝ、

「はい、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔になつて、邪魔で、邪魔で、私や何だつて、つまらない、學校へなんぞ行つたんでせう。邪魔で、邪魔でしやうがありません。」

言ふ〳〵其眉動いたり。

四

「しかし、此様でもありません。」

主婦は俯向きて傍を見向きたり。色白くうつくしき男の兒の、太く痩せたるが疲れし狀にて、あをむけに枕して臥したる、色褪せし茜木綿の枕かけに、鼠の齒形つきて、蕎麥の殼は溢れ出でつ。

寢ねたる兒は、氣高き瞼を心ばかり動かしながら、幽に鼾をぞ立てたりける。

ぢつと下眼に見ながら、

「學校へ參つたのが邪魔になるッたつて、書籍を讀んだのが妨害になりますたつて、此兒ほどぢやあないんです。こんなに邪魔になるものはありません。こんな面倒ッ臭いものはないんです。」

と聲をふるはして、主婦はまたも息をつきぬ。

須賀子の暖かなる右の腕は、ソと枕の下より、寢ねたる兒の項をからめり。

「御道理です、貴女、そりや御道理ぢやありますけれども、御自分で、御勝手に御自分のなすつた學問を邪魔に遊ばすやうに、このお兒樣を邪魔になすつちやあ不可ません。この、まあ、お

色の白い、華奢な、御發明さうな、可愛い、お顏つたらない。御覽なさいましな。野原で堇でも摘んで、あちこち眴しておいでの處の、夢でも見て在らつしやるんだよ、屹と。あれ、睡つておいでの眼の中が、動きますぢやあございませんか。」

と頰ずりしていふ。主婦は口許を弛めもせで、

「食物でも搜してる夢なんでせう。それがまた動かないやうになれば、お須賀さん、もう活きちやあ居ないんですもの。何も眼を動かして居たからたつて、變つたことはありません。」

「まあ、そんな理窟ぽいことはおよしなさいまし。可愛らしいに、理窟も何もありませんわね、貴女、もうお幾歳におなんなさいますの、お三歳？」

「いゝえ、五歳です。養が不十分な故でせう、毎月些とづゝ小さくなります。」

といひかけて眼をしばたゝけり。須賀子はわざと心には留めざる狀しつ。

「それが矢張可愛くつて在らつしやるんですよ。可いぢやありませんか。掌中の珠つていひますもの。でく〳〵したのは削りかいて、石垣にでもするが可ござんす、ねえ。」

と兒の耳に口をつけしが、恁くして呼ぶべき、其幼兒の名を知らざりき。

「何と然うおつしやるの。お名は、あの何とおつしやるの。」

主婦は投出したる口氣にて、

「そんな兒に名なんぞが要りますものか、詰りません！」
「何をおつしやるんですよ。」
「いゝえ、それでもね、生れた時には良人と二人で、木の性だから、あゝだの、水の性だからかうだのつて、源平藤橘なんか引張合つてつけたんですがね、今ぢや氣恥かしくつていけません。」
「飛んだことばかりおつしやいますのね、ま、あなたが何んな御出世を遊ばさうも知れませんけれど、萬々一にも此のまゝでお暮し遊ばすにした處で、お身體に備はつたお位を、そつくりこのお兒樣にお讓り遊ばしたのと思つて在らつしやれば可いぢやありませんかね。きつと御出世を遊ばすわ。このお顏つきを御覽なさいな。……卿とでも、何とでもお名のりなすツたつて可いぢやありませんか。ね、眞個に何とおつしやるんですよ」。
わづかに笑ひて、
「しんこッていふんです。しんこ——新粉ッて言ふんです。」
「新粉ッて妙ですね。」
「その位なもんでせう。」
須賀子は膝を寄せたり。二人は顏を見合せぬ。
「そんなお名ッてのがあるもんですか。」

「いゝえ。」

五

「それでもはじめの內は世間普通で、人樣にお交際の出來るやうな名をつけて置いたんです。」、主婦は手近なる硯箱引寄せつ。蓋は盆にかへて、小さき皿に煎餅裝りたるを乘せて先刻須賀子に與へたり。硯の中少しばかり濡れたりしに筆をつけて、掌に、信行の二字をば見事に書いて見する。
「お須賀さん、これを訓にしてつけておいたの。」
「おや、信さん、信行樣ですか。可い名だこと。」
「それ御覽なさい。ですから今ぢや、氣恥かしくッて、人樣の前ぢや信行ッていへませんから、無暗に信行、新粉ッて然ういふんです、困りますよ、お巡査さんが戶籍を檢においでの時、一々名を讀み立てられるには。ほんとに、新粒にしてしまへばいゝ。いづれ、兩親の玩弄物になつて、後で日が經てば、干からびて、うつちやられる位なもんです、お須賀さん。」
と凜として、聲に力を籠めてぞいひたる。

六

須賀子はめまじろぎもせで聞きたりしが、急に身を投げて、幼兒の腹に、ふつくりと襲着せる、衣柔かなる胸をあてて、兩手に犇と抱きつゝ、膝にのせてかゝへ起せば、うつとりと眼をあきながら、なほ人顏をわきまへで、其まゝおしあてたる兒の頭に、須賀子は頰をつけながら、怨むが如く、

「不可ませんよ。不可ませんよ。もう、そんなことおつしやる方に、此兒を預けちや置かれません。何うして、この坊ちやんを、あなたに持たして置かれますものか。危い！」

「え。」

「危險ですわ、ほんたうに……」

と呟きつゝ、面を正して屹となりぬ。

「あなた。」

「はい。」

「このお兒を、私に下さいませんか。」

「あの、信行を。」

「え、私に下さいまし。何卒私に下さいましな。兒を持つたことはございませんが、育て方は教はりました。貴女、學校の先生は、宛然違つたことばかりは教へますまい、屹とお育て申ます。立派に大人にして見せますから、思ひ切つて預けて下さい。」

主婦はまた須賀子の顏を瞻りたり。

「しかし、其は私一人の兒ぢやありませんもの。」

「旦那樣には何とでも可いやうにおつしやいましな。遺したとでも、忘れたとでも。あらたまつて申したら、そりや、何てッたつて、お一人子を、他人手にかけようとはおつしやいますまいから、其處はあなたが計らつて、何とでもいゝやうにして、何うぞ私に預けて下さい。ね、あなた、可いでせう。」

主婦は言はざりき。

「可いでせうね、いけないたつて、何うしてもお連れ申しますよ！」

「學校の氣でいらつしやる。」

と珍しくもいとにぎやかに笑ひたる、渠は眞とはせざりしなり。

須賀子は色を正して、

「串戲ではありません、あなた。」

一際聲を沈めつゝ、

「あなたに持たして置きますとね、坊ちやんの身が案じられます。しまひにや殺さずには置きますまい！」

主婦は蒼くなりぬ。

戸外の門慌しく引きあけて、裾をば端折りたる痩脛長く、ひよこ〳〵と身を浮かして、ものの忍びやかに、然れど息忙しく、走り入りたるは家の主人なり。其瞳定まらで、うろ〳〵と眴す眼に、女性の客も見えざりけむ、身を繕はむともせで妻の傍に踞ひつ。助けを求むる如き弱き聲にて、

「お品、あゝ吃驚した〳〵。」

「何う遊ばしたの。」

極めて何氣なき狀したれど、眼の色はたゞならず。今女作家に看破されし胸の内の、見え透くとや惟ふらむ。

良人は唯どぎまぎする。

「あゝ、あゝ、お品、憲兵さんが來た。」

「靴をおつしやいます。」

「何てッて、お前、來たよ、憲兵さんが來たよ。憲兵さんが來たんだよ。」

「憲兵さんが何ういたしました。」

「うむにやさ、憲兵さんがの、今日な、ぼてふりの角がお前。河岸のこぼれだつて、見事な奴を一尾持つて居たらう。見ると、旨さうでハヤ蟲唾が走つて堪らんぢや。處で、五百出して大い奴の、これだけあらうといふのを買ひ込んで、一番うむと御馳走にならうと思うて、まだ仕事中ぢやつたが、一度中歸をして、宅へ置いて出直さうと思うて、踏切の此方まで來ると、あゝ、吃驚せまいことか。むかうから年の若い、顏の緊つた、一見識あらうといふ、立派な憲兵さんが、お馬で、ずい、とやつてござる。あわをくツて半被の下へかくしたけれど、例のが、のはうずに大いと來て居るので、ぬうと尾のさきが見えくさる。はッと思つた、と、むかうでも眼を着けた、南無三ぢや。御法度は承知なり、お前もさういつたつけが、憲兵さんはきびしいで、巡査のやうなものではなうて、恐しく取ッちめると知つてたで、堪らぬわ。其まゝ地面へうつちやつて遁げて來たが、何うもな、あとをつけて來たやうで落着かれぬ。一廉、とがめられずには濟むまいかの、の、お品。」

とて屈託顏する、笑止なり。恁るものを、冷かに笑ひ棄てむとも妻はせで、

「何です、あなた、何をおうつちやりなすつたの。」

「えゝ、御法度の例物よ。それ、くはぬたはけに食ふたはけといふ。」
「お魚？」
「やれ分りのわるい、鯰ぢや。」
「まあ、何うも。」
と、微笑みたり。須賀子は、人の兒を抱きたるまゝ、身を開きて、片寄りつ。此方より差出でて、われを名告らむともなさざりき。
「坊にも食はさうものを、可惜ことをした。まあ、身體中がなまぐさい。」
と袖を開きて香を嗅ぎしが、眉根を寄せてぞ仰向きたる。やがて其細き眼に、フト女作家を認めたり。認めあへず、けたゝましく、
「や、お姫様。何處の？」
とばかり、おど〳〵して額づきぬ。

七

主人は見も知らざる眩き婦人の、目前に居たるに心また打騒ぎて、いよ〳〵落着かざる狀の、なほきよと〳〵と、後見らるゝ顏色にて、手を揉み腰を浮かしながら、戸の方を顧みたるが、再

び顚倒して色を失しぬ。
「や、や、だから其れいはぬことか。アレ見えた、さあ大變ぢや。お品拜む、助けると思うて、うまく言譯をしておくれ。俺もう此處には居られぬ。あなたも何卒、何卒お言葉お添へなされて、穩便に、穩便に、出るぞ、賴む。」
といひあへず、室の中を立つてまはりて、打つかるやう裏口より田圃へ拔けて駈け出せり。二人は顏を見合せつ。齊しく戸外に眼を注げば、手綱を控へて人居たり。軒よりも高きあたり、近衛士官の制服なる緋の洋袴の片足の豐に鞍にぞ跨りたる、女作家は見て微笑みぬ。
「あれ、旦那様はまあ彼の兒を、憲兵とお間違へなすつたんですよ、お品さん、弟です、」
「それぢや、あの、」
「はい、Xをさしあげました弟ですわ。」
女作家はいひかけて、信行を抱きたるまゝ、裳を捌き、するりと立ちて、端近に立出でて、
「千代さん——千代さん。」
「えゝ。」と答へ、馬上よりすかし見て、
「おや、姉様、此處に。」
といふより、佩劍の柄持添へて、ひらりと馬よりおり立ちぬ。

「今ね、おもしろい男がさ、僕を見て、あの踏切へ鰒をうつちやつて駈出したから、妙なことをすると思つて、あとをつけて來たんですが、姉様、何誰の。」
「はあ、お品さんのお宅なの。一寸御挨拶申すが可い、貴女、千代太郎です。」
少年士官は轡を取つて、歩武を進め、框の外に一揖して、
「其後は。」
「久時でございました。」
恁りし時、この品子の、其眉秀で、其鼻隆く、其口しまり、其眼涼しく、全幅の風采をあげて、一個また單に貧家の妻にてはあらざりき。
須賀子は何をか捌かむ狀にて、
「千代さん、お前散歩かい。」
「は、雑司ヶ谷の方から新井へまはつて來ました、日曜で、お天氣ですから。」
「まあ、よくね、いゝ處で出逢つたよ。些少おあがりでないか。お邪魔をさしてお頂きな。」
「何うぞ。さあ、」
「いえ、大きな荷物がありますから。いづれ、」
少年士官は打笑しが、轡の音して、鰭爪の響いと高く聞えたり。

座を立ちし時、目覺まし居たる稚きものの、優しき腕に手を縋りて、人見知もせで莞爾やかなりしが、大なる動物の氣勢するに、ふと其頭をあげたるが、士官の乘馬を眼ばやく見て、
「お馬、お馬。」
背返りして、須賀子の腕に伸びあがり、愉快らしく指さしいふ。
「おゝ、お馬、お馬。坊ちやん、お好き、アノお好なんですか。」
「まるで夢中です。」
「勇ましいことね。千代さん、ちつとお抱き申して乘せておあげだといゝ。」
「結構、さあ入らつしやい。」
「泣かせちやあ、嫌よ。」
と片足土間に下りざまに、須賀子は弟の手に、信行を渡すとて、ソと目配しつ。
「遠くへ行かないでさ。」
品子は端然として見たるのみ。
「恐入ります。」
「どれ。」と抱き取り、其まゝひらりと士官は騎しつ。立ちもやらざる品子の顏をぢつと見て面を背け、笑顏の頰をば稚兒の、頤にあてて俯向きつゝ、肅として彳みしが、鞭あてむとせず、おの

づから馬にまかせて打つたりける。
「お須賀さん。」
いま座に歸れる須賀子の手を、主婦は突然固く握り、年上のおのが膝に引寄するが如くにし、色をかへて身を震はせしが、何思ひけむ笑出しぬ。
「ほゝゝ、あなたは鰒をあがりますか。」
と握りたる手に力を籠むる、突如としたる擧動に、さすがの作家も氣を奪はれ、呆れて、眼を睜りて、眞顏に主婦を瞻るのみ。
「あがるんですか、あの、鰒といふものを、え？」
「いゝえ。」と内端に答へたり。
品子は頷き、
「あがりません、然うでせう。けれども、そりや貴女お一人だからさ、いまに御婚禮をなさいますと、さうすると、屹と鰒をおあがりですよ。」
「何うですか。」
女作家は茫然たり。あるじは膝の上に、おさへたる年下の女の手を、また强く推着けながら、
「何うですかッてもね、お須賀さん、こゝに毒があります、可ございますか。恐しい、恐しい、毒

なものがあると、言つたやうな譯ですよ。見るも嫌、食べたら生命にでも障りはせぬかと悚毛が立つと、して置くんですよ、解りましたか。
すると、自分の旦那が其を食べて、何うせ中毒つて死ぬものなら一所ぢやあないか。毒にあたる分には誰だつておんなじことだのに、夫婦のなかで、一人が食べるものを、一人が食べないといふことはない。
トさあ、こんなことに成つたら何うします、お須賀さん、お須賀さん。」
須賀子はわッと泣き出しぬ。しつかと其肩搔抱きて、
「もう一度、あなたと打毬がして遊びたいね。」
と言ひかけてはら〳〵と落涙せり。

八

「あれ彼處に。」
と見やりたる、一叢薄の薄き雲、白き穗の茂れるなかに、黑き駒見え、緋のズボン、輝く劍も見えすきたり。
駒のたてがみ風に縺れて、颯と靡いたる薄の上に、近衛士官の帽あらはれ、波のまに〳〵打つ

如く、廣野の末を一直線に行きつ戻りつしたりしが、立停りて、やゝある間に、須賀子は走り近づきつ。

と見れば、榛の樹の低き枝に、蟷螂の一ツ居つ。少年士官は一本の薄を拔き取り、蟲が傾くる斧をつゝきて、龍車に向ふ其怒りの、もの〳〵しく可笑きを、抱きたる稚兒に指し示して、賺し、且つ慰めたるなり。

姉は見るより莞爾として、

「よくおもりが出來るのね。」

「一度泣きかゝつて困つたよ。そしてもう歸るんかね。」

「はあ、あの品子さんは踏切の信號をね、內職にして居るんだツて、ちやうど時間だから停車場へ行きながら送つて下さるツて、私はこれに乘つて牛込見附まで行くつもりだから。そしてとうとうこのお兒を貰つたよ、ほんたうに私や泣いたよ、可哀相ツちやあない。鰒まで食べさせられりや澤山だわ。」

「何うしたんです。」

「まあ、歸つてゆつくり話さうね。さあ、坊ちやんを此方へおよこし、高い處で、また蟲でも起しちゃ不可ません。」

「で、貰つて、直ぐ連れて歸られますか。」

「あゝ、然うとも。」

「そりや可ござんした。」

姉の抱き取りたる信行をば、馬上より打視め、

「眼を御覽なさい、姉樣、母樣の兒です。僕も可愛がりませう。」

「あゝ、然うしておくれ、嬉しいこと。」

顧みれば、品子の、縞柄も分らぬまで着古したる素袷の裾は切れて、海松の如く、もつれて、垂れて、砂にまみるゝに、彼の稜骨を包みつゝ、穿き切らしたる冷飯草履に、身をまかし棄てて、ぞ歩し來る。帶も細紵のまゝなれば、正しき衣紋も亂れて見ゆ、肩のあたりもいた〳〵し、あはれ、其まゝ野に臥しなば、小町の髑髏となんぬべく、目ざましきまで衰へたり。

心輕く須賀子は立寄り、

「ぢやあ、母樣、わざツと、最う參りますよ、可ござんすか。」

額くを見るや、否や、稚兒を引しめて、はた〳〵と走り過ぎ、線路の橋を渡り越して、停車場に駈け入りしが、直ちに待合所に出來れり。溝を隔てて眼の前に、品子は信號旗の捲いたるを力なく携へつゝ、立木の幹に背を倚たして、あらぬ方をば打視遣りぬ。

汽車來れり。

凄じき響とともに、信行の、須賀子が膝より跳ね下りぬ。不意の物音に驚きけむ。

「母ちやん〳〵。」

と呼はりあへず、帶の結目ひら〳〵と、可愛き足の踵を見せてむかひ側なる母をあてに、アレヨといふまに走り出でて、線路の石壇に早や下りたり。蒼くなりて須賀子は飛び着き、危ふく抱いて取る時疾し、流るゝ如く走りし汽車の一ゆりゆつて留りぬ。

同時に須賀子は吻と呼吸して、人の見る目の晴がましきも思はず、高く頭の上に稚兒をッと差上げたる時、品子の手なる信號旗の靑きがひらりと飜りつ。地響して汽車留まりしトタン、無量の思を籠めたる眼に、彼方に背く品子の顏を、つく〴〵と打まもる。時に、信行の危かりしに手に汗握れる少年士官は、ハッとわれに返りし狀にて、衣兜なる時計を探り、カチと蓋あけて俯向き見たるが、手にせる薄を其まゝに、一あてあてて穗の波を浮いつ沈みつ行過ぎたり。

汽車また動きぬ。須賀子と稚兒を乘せ去りたるなり。

秋の日はやゝうすづきて、遠近の森は暗うなりぬ。淋しき野末に靑き旗の絞りたるを提げつゝ、寂として彳みたる、品子が冷かなる眼の注げるは、十町一列に穗の揃へる薄の穗と相並びて、東西に走りて雲に入る、二筋長き線路の上に、鰒の引裂かれし其なりき。

化鳥

一

愉快いな、愉快いな、お天氣が惡くつて外へ出て遊べなくつても可いや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしよ〳〵濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。

菅笠を目深に被つて、激に濡れまいと思つて向風に俯向いてるから顏も見えない、着て居る蓑の裙が引摺つて長いから、脚も見えないで歩行いて行く、脊の高さは五尺ばかりあらうかな、猪としては大なものよ、大方猪ン中の王樣が彼樣三角形の冠を被て、市へ出て來て、而して、私の母樣の橋の上を通るのであらう。

トかう思つて見て居ると愉快い、愉快い、愉快い。

寒い日の朝、雨の降つてる時、私の小さな時分、何日でしたつけ、窓から顏を出して見て居ました。

「母樣、愉快いものが歩行いて行くよ。」

爾時母樣は私の手袋を拵へて居て下すつて、

「さうかい、何が通りました。」

「あのウ猪。」

「さう。」といつて笑つて在らつしやる。

「ありや猪だねえ、猪の王樣だねえ。

母樣。だつて、大いんだもの、そして三角形の冠を被て居ました。さうだけれども、王樣だけれども、雨が降るからねえ、びしよぬれになつて、可哀相だつたよ。」

母樣は顏をあげて、此方をお向きで、

「吹込みますから、お前も此方へおいで、そんなにして居ると、衣服が濡れますよ。」

「戸を閉めよう、母樣、ね、こゝん處の。」

「いゝえ、さうしてあけて置かないと、お客樣が通つても橋錢を置いて行つてくれません。ずるいからね、引籠つて誰も見て居ないと、そゝくさ通拔けてしまひますもの。」

私は其時分は何にも知らないで居たけれども、母樣と二人ぐらしは、この橋錢で立つて行つたので、一人前幾干宛取つて渡しました。

橋のあつたのは、市を少し離れた處で、堤防に松の木が並んで植つて居て、橋の袂に榎が一本、時雨榎とかいふのであつた。

此榎の下に、箱のやうな、小さな、番小屋を建てて、其處に母様と二人で住んで居たので、橋は粗造な、宛然、間に合せといつたやうな拵へ方、杭の上へ板を渡して竹を欄干にしたばかりのもので、それでも五人や十人ぐらゐ一時に渡つたからッて、少し搖れはしようけれど、折れて落ちるやうな憂慮はないのであつた。

ちやうど市の場末に住んでる日傭取、土方、人足、それから、三味線を彈いたり、太鼓を鳴して飴を賣つたりする者、越後獅子やら、猿廻やら、附木を賣る者だの、唄を謠ふものだの、元結よりだの、早附木の箱を内職にするものなんぞが、目貫の市へ出て行く往歸りには、是非母様の橋を通らなければならないので、百人と二百人づゝ朝晩賑かな人通りがある。

それからまた向うから渡つて來て、この橋を越して場末の穢い町を通り過ぎると、野原へ出る。そこン處は梅林で、上の山が櫻の名所で、其下に桃谷といふのがあつて、谷間の小流には、菖蒲、燕子花が一杯咲く。頬白、山雀、雲雀などが、ばら〳〵になつて唄つて居るから、綺麗な着物を着た問屋の女だの、金滿家の隱居だの、瓢を腰へ提げたり、花の枝をかついだりして千鳥足で通るのがある。それは春のことで。夏になると納涼だといつて人が出る。秋は蕈狩に出懸けて來る、遊山をするのが、皆内の橋を通らねばならない。

この間も誰かと二三人づれで、學校のお師匠さんが、内の前を通つて、私の顔を見たから、下

寧にお辭儀をすると、おや、といつたきりで、橋錢を置かないで行つてしまつた。

「ねえ、母様、先生もずるい人なんかねえ。」

と窓から顔を引込ませた。

二

「お心易立なんでせう、でもずるいんだよ。餘程さういはうかと思つたけれど、先生だといふから、また、そんなことで惡く取つて、お前が憎まれでもしちやなるまいと思つて、默つて居ました。」

といひ〳〵母様は縫つて在らつしやる。

お膝の上に落ちて居た、一ッの方の手袋の、恰好が出來たのを、私は手に取つて、掌にあてて見たり、甲の上へ乘ッけて見たり、

「母様、先生はね、それでなくつても僕のことを可愛がつちやあ下さらないの。」

と訴へるやうにいひました。

かういつた時に、學校で何だか知らないけれど、私がものをいつても、快く返事をおしでなかつたり、拗ねたやうな、けんどんなやうな、おもしろくない言をおかけであるのを、いつでも情

ないと思ひ〳〵して居たのを考へ出して、少し鬱いで來て俯向いた。

「何故さ。」

何、さういふ樣子の見えるのは、つい四五日前からで、其前には些少もこんなことはありはしなかつた。歸つて母樣にさういつて、何故だか聞いて見ようと思つたんだ。

けれど、番小屋へ入ると直飛出して遊んであるいて、歸ると、御飯を食べて、そしちやあ横になつて、母樣の氣高い美しい、賴母しい、穩當な、そして少し痩せておいでの、髮を束ねてしつとりして在らつしやる顏を見て、何か談話をしいしい、ぱつちりと眼をあいてるつもりなのが、いつか、其まんまで寢てしまつて、眼がさめると、また直支度を濟して、學校へ行くんだもの。そんなこといつてる隙がなかつたのが、雨で閉籠つて、淋しいので思ひ出した、次手だから聞いたので。

「何故だつて、何なの、此間ねえ、先生が修身のお談話をしてね、人は何だから、世の中に一番えらいものだつて、さういつたの。母樣、違つてるわねえ。」

「むゝ。」

「ねッ違つてるワ、母樣。」

と揉くちやにしたので、吃驚して、ぴつたり手をついて疊の上で、手袋をのした。横に皺が寄

つたから、引張つて、

「だから僕、さういつたんだ、いゝえ、あの、先生、さうではないの。人も、猫も、犬も、それから熊も、皆おんなじ動物だつて。」

「何とおつしやつたね。」

「馬鹿なことをおつしやいつて。」

「さうでせう。それから、」

「それから、(だつて、犬や、猫が、口を利きますか、ものをいひますか)ッて、さういふの。いひます。雀だつてチッチッチッチッて、母樣と、父樣と、兒と朋達と皆で、お談話をしてるぢやありませんか。僕眠い時、うつとりしてる時なんぞは、耳ン處に來て、チッチッチて、何かいつて聞かせますのッてさういふとね、(詰らない、そりや囀るんです。ものをいふのぢやあなくッて囀るの、だから何をいふんだか分りますまい)ッて聞いたよ。僕ね、あのウだつてもね、先生、人だつて、大勢で、皆が體操場で、てんでに何かいつてるのを遠くン處で聞いて居ると、何をいつてるのか些少も分らないで、ざあ〳〵ッて流れてる川の音とおんなしで、僕分りませんもの。それから僕の內の橋の下を、あのウ舟漕いで行くのが何だか唄つて行くけれど、何をいふんだかやつぱり鳥が聲を大きくして長く引ぱつて鳴いてるのと違ひませんもの。ずッと川下の方で、

ほう〳〵ッて呼んでるのは、あれは、あの、人なんか、犬なんか、分りませんもの。雀だつて、四十雀だつて、軒だの、榎だのに留つてないで、僕と一所に坐つて話したら皆分るんだけれど、離れてるから聞えませんの。だつて、ソッとそばへ行つて、僕、お談話しようと思ふと、皆立つていつてしまひますもの、でも、いまに大人になると、遠くで居ても分りますッて。小さい耳だから、澤山いろんな聲が入らないのだつて、母様が僕、あかさんであつた時分からいひました。犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。」

三

母様は莞爾なすつて、

「あゝ、それで何かい、先生が腹をお立ちのかい。」

そればかりではなかつた、私の兒心にも、アレ先生が嫌な顔をしたな、ト斯う思つて取つたのは、まだモ少し種々なことをいひあつてから、それから後の事で。

はじめは先生も笑ひながら、ま、あなたが左様思つて居るのなら、しばらくさうして置きませう。けれども人間には智慧といふものがあつて、これには他の鳥だの、獸だのといふ動物が企て及ばないといふことを、私が河岸に住まつて居るからつて、例をあげておさとしであつた。

釣をする、網を打つ、鳥をさす、皆人の智慧で、何も知らない、分らないから、つられて、刺されて、たべられてしまふのだトかういふことだつた。そんなことは私聞かないで知つて居る、朝晩見て居るもの。

橋を挾んで、川を溯つたり、流れたりして、流網をかけて魚を取るのが、川ン中に手拱かいて、ぶる〳〵ふるへて突立つてるうちは、顏のある人間だけれど、そらといつて水に潛ると、逆になつて、水潛をしい〳〵五分間ばかりも泳いで居る、足ばかりが見える。其足の恰好の惡さといつたらない。うつくしい、金魚の泳いでる尾鰭の姿や、ぴら〳〵と水銀色を輝かして跳ねてあがる鮎なんぞの立派さには全然くらべものになるのぢやあない。さうしてあんな、水浸になつて、大川の中から足を出してる、そんな人間がありますものか。で、人間だと思ふとをかしいけれど、川ン中から足が生えたのだと、さう思つて見て居るとおもしろくッて、ちつとも嫌なことはないので、つまらない觀世物を見に行くより、ずつとましなのだつて、母様がさうお謂ひだから、私はさう思つて居ますもの。

それから、釣をしてますのは、ね、先生、とまた其時先生にさういひました。あれは人間ぢやあない、蕈なんで、御覽なさい。片手懷つて、ぬうと立つて、笠を被つてる姿といふものは、堤防の上に一本占治茸が生えたのに違ひません。

夕方になつて、ひよろ長い影がさして、薄暗い鼠色の立姿にでもなると、ます〳〵古治茸で、ずつと遠い〳〵處まで一ならびに、十人も三十人も、小さいのだの、大きいのだの、短いのだの、長いのだの、一番橋手前のを頭にして、さかり時は毎日五六十本も出來るので、また彼處此方に五六人づゝも一團になつてるのは、千本しめぢッて、くさ〳〵に生えて居る、それは小さいのだ。木だの、草だのだと、風が吹くと動くんだけれど、蕈だから、あの、蕈だからゆつさりとしもしませぬ。これが智慧があつて釣をする人間で、些少も動かない。其間に魚は皆で悠々と泳いでゐるいて居ますわ。

また智慧があるつても、口を利かれないから鳥とくらべッこすりや、五分々々のがある、それは鳥さしで。

過日見たことがありました。

餘所のをぢさんの鳥さしが來て、私ン處の橋の詰で、榎の下で立留まつて、六本めの枝のさきに可愛い頬白が居たのを、棹でもつてねらつたから、あら〳〵ッてさういつたら、叱ッ、默つて、默つて。恐い顏をして私を睨めたから、あとじさりをして、そッと見て居ると、呼吸もしないで、ちつとして、石のやうに默つてしまつて、かう据身になつて、中空を貫くやうに、じりつと棹をのばして、覗つてるのに、頬白は何にも知らないで、チ、チ、チッチッてッて、おもしろさうに、

何かいつてしやべつて居ました。其をとう〳〵突いてさして取ると、棹のさきで、くる〳〵と舞つて、まだ烈しく聲を出して鳴いてるのに、智慧のある小父さんの鳥さしは、默つて、鮨摑にして、腰の袋ン中へ捻り込んで、それでもまだ默つて、ものもいはないで、のつそり去つちまつたことがあつたんで。

四

頬白は智慧のある鳥さしにとられたけれど、囀つてましたもの。ものをいつて居ましたもの。をぢさんは默りで、傍に見て居た私までものを言ふことが出來なかつたんだもの。何もくらべつこして、どつちがえらいとも分りはしないつて。

何でもそんなことをいつたんで、ほんたうに私さう思つて居ましたから。

でも、其を先生が怒つたんではなかつたらしい。

で、まだ〳〵いろんなことをいつて、人間が、鳥や獸よりえらいものだと然ういつておさとしであつたけれど、海ン中だの、山奥だの、私の知らない、分らない處のことばかり譬に引いていふんだから、口答は出來なかつたけれど、ちつともなるほどと思はれるやうなことはなかつた。

だつて、私、母様のおつしやること、虚言だと思ひませんもの。私の母様がうそをいつて聞か

せますものか。

先生は同一組の小兒達を三十人も四十人も一人で可愛がらうとするんだし、母樣は私一人可愛いんだから、何うして、先生のいふことは私を欺すんでも、母樣がいつてお聞かせのは、決して違つたことではない、トさう思つてるのに、先生のは、まるで母樣のと違つたことといふんだから心服はされないぢやありませんか。

私が頷かないので、先生がまた、それでは、皆あなたの思つてる通りにして置きませう。けれども木だの、草むのよりも、人間が立ち優つた、立派なものであるといふことは、いかな、あなたにでも分りませう、先づそれを基礎にして、お談話をしようからつて、聞きました。

分らない、私さうは思はなかつた。

「あのウ母樣、（だつて、先生、先生より花の方がうつくしうございます）ッてさう謂つたの。僕、ほんたうにさう思つたの、お庭にね、ちやうど菊の花の咲いてるのが見えたから。」

先生は束髪に結つた、色の黑い、なりの低い巖乘な、でく〳〵肥つた婦人の方で、私がさういふと顏を赤うした。それから急にッケンドンなものいひおしだから、大方其が腹をお立ちの原因であらうと思ふ。

「母樣、それで怒つたの、さうなの。」

母樣は合點々々をなすつて、

「おゝ、そんなことを坊や、お前いひましたか。そりや御道理だ。」

といつて笑顏をなすつたが、これは私の惡戲をして、母樣のおつしやること肯かない時、ちつとも叱らないで、恐い顏しないで、莞爾笑つてお見せの、其とかはらなかつた。

さうだ。先生の怒つたのはそれに違ひない。

「だつて、虛言をいつちやあなりませんつて、さういつでも先生はいふ癖になあ。ほんたうに僕、花の方がきれいだと思ふもの。ね、母樣、あのお邸の坊ちやんの、青だの、紫だの交つた、着物より、花の方がうつくしいつて、さういふのね。だもの、先生なんざ。」

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前でいふのではありません。お前と、母樣のほかには、こんないゝこと知つてるものはないのだから。分らない人にそんなことといふと、怒られますよ。唯、ねえ、さう思つて居れば可いのだから、いつてはなりませんよ。可いかい。そして先生が腹を立つてお憎みだつて、さういふけれど、何そんなことがありますものか。其は皆お前がさう思ふからで、あの、雀だつて餌を與つて、拾つてるのを見て、嬉しさうだと思へば嬉しさうだし、頰白がをぢさんにさゝれた時悲しい聲だと思つて見れば、ひい〳〵いつて鳴いたやうに聞えたぢやないか。

それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見て居ないで、今お前がいつた、其うつくしい菊の花を見て居たら可いでせう。ね、そして何かい、學校のお庭に咲いてるのかい。」

「あゝ澤山。」

「ぢやあ其菊を見ようと思つて學校へおいで。花はね、ものをいはないから耳に聞えないでも、其かはり眼にはうつくしいよ。」

モひとつ不平なのはお天氣の惡いことで、戸外には、なか〳〵雨がやみさうにもない。

五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚が繁くつて、宛然、薄墨で刷いたやう、堤防だの、石垣だの、蛇籠だの、中洲に草の生えた處だのが、點々、彼方此方に黑ずんで居て、それで濕つぽくつて、暗かつたから見えなかつたが、少し晴れて來たから、ものの濡れたのが皆見える。

遠くの方に堤防の下の石垣の中ほどに、置物のやうになつて、畏つて、猿が居る。

この猿は、誰が持主といふのでもない。細引の麻繩で棒杭に結へつけてあるので、あの、濕地茸が、腰辨當の握飯を半分與つたり、坊ちやんだの、乳母だのが、袂の菓子を分けて與つたり、紅い着物を着て居る、みいちやんの紅雀だの、青い羽織を着て居る吉公の目白だの、それからお

耶のかなりやの姫樣なんぞが、皆で、からかひに行つては、花を持たせる、手拭を被せる、水鐵砲を浴せるといふ、好きな玩弄物にして、其代何でもたべるものを分けてやるので、誰といつて、きまつて世話をする、飼主はないのだけれど、猿の餓ゑることはありはしなかつた。

時々惡戯をして、其紅雀の天窓の毛を拶つたり、かなりやを引搔いたりすることがあるので、あの猿松が居ては、うつかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出しては置けない、誰か見張つてでも居ないと、危險だからつて、ちよい〳〵繩を解いて放して遣つたことが幾度もあつた。

放すが疾いか、猿は方々を駈ずり廻つて勝手放題な道樂をする。夜中に月が明い時、寺の門を叩いたこともあつたさうだし、人の庖廚へ忍び込んで、鍋の大いのと飯櫃を大屋根へ持つて、あがつて、手摑で食べたこともあつたさうだし、ひら〳〵と青いなかから紅い切のこぼれて居る、うつくしい鳥の袂を引張つて、遙に見える山を指して氣絶さしたこともあつたさうなり、私の覺えてからも一度誰かが、繩を切つてやつたことがあつた。其時はこの時雨榎の枝の兩股になつてる處に、仰向に寢轉んで居て、鳥の脛を捕へた。それから畚に入れてある、あのしめぢ蕈が釣つた、沙魚をぶちまけて、散々惡巫山戯をした擧句が、橋の詰の浮世床のをぢさんに摑まつて、額の毛を眞四角に鋏まれた、それで堪忍をして追放したんださうだのに、夜が明けて見ると、また平時の處に棒杭にちやんと結へてあツた。蛇籠の上の、石垣の中ほどで、上の堤防には柳の切株

がある處。

またはじまつた、此通りに猿をつかまへて此處へ縛つとくのは誰だらう〳〵ッて一しきり騒いだのを私は知つて居る。

で、此猿には出處がある。

其は母様が御存じで、私にお話しなすつた。

八九年前のこと、私がまだ母様のお腹ん中に小さくなつて居た時分なんで、正月、春のはじめのことであつた。

今は唯廣い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、此番小屋と假橋の他にはないが、其時分は此橋ほどのものは、邸の庭の中の一ッの眺望に過ぎないのであつたさうで。今、市の人が春、夏、秋、冬、遊山に來る、櫻山も、桃谷も、あの梅林も、菖蒲の池も皆父様ので、頰白だの、目白だの、山雀だのが、この窓から堤防の岸や、柳の下や、蛇籠の上に居るのが見える、其身體の色ばかりが其である、小鳥ではない、ほんたうの可愛らしい、うつくしいのがちやうどこんな工合に朱塗の欄干のついた二階の窓から見えたさうで。今日はまだお言ひでないが、かういふ雨の降つて淋しい時なぞは、其時分のことをいつでもいつてお聞かせだ。

六

今ではそんな樂しい、うつくしい、花園がないかはり、前に橋錢を受取る笊の置いてある、この小さな窓から風がはりな猪だの、希代な蕈だの、不思議な猿だの、まだ其他に人の顏をした鳥だの、獸だのが、いくらでも見えるから、ちつとは思出になるといつちやあ、アノ笑顏をおしなので、私もさう思つて見る故か、人があるいて行く時、片足をあげた處は一本脚の鳥のやうでおもしろい。人の笑ふのを見ると獸が大きな赤い口をあけたよと思つておもしろい。みいちやんがものをいふと、おや小鳥が囀るかとさう思つてをかしいのだ。で、何でも、おもしろくッて、をかしくッて、吹出さずには居られない。

だけれど今しがたも母様がおいひの通り、こんないゝことを知つてるのは、母様と私ばかりで、何うして、みいちやんだの、吉公だの、それから學校の女の先生なんぞに敎へたつて分るものか。

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛められて責まれて、煮湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭うたれて、朝から晚まで泣通しで、咽喉がかれて、血を吐いて、消えてしまひさうになつてる處を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髮が動いて、唇が破れた處で、口惜しい、口惜しい、口惜

しい、口惜しい、畜生め、獣めと始終さう思つて、五年も八年も經たなければ、眞個に分ることではない、覺えられることではないんださうで、お亡んなすつた、父様とこの母様とが聞いても身震がするやうな、さういふ酷いめに、苦しい、痛い、苦しい、辛い、慘酷なめに逢つて、さうしてやう〳〵お分りになつたのを、すつかり私に教へて下すつたので。私はたゞ母ちやん〳〵てツて母様の肩をつかまへたり、膝にのつかつたり、針箱の引出を交ぜかへしたり、物さしをまはして見たり、裁縫の衣服を天窓から被つて見たり、叱られて遁げ出したりして居て、それでちやんと教へて頂いて、其をば覺えて分つてから、何でも、鳥だの、獣だの、草だの、木だの、蟲だの、蕈だのに人が見えるのだから、こんなおもしろい、結構なことはない。しかし私にかういふいゝことを教へて下すつた母様は、とさう思ふ時は鬱ぎました。これはちつともおもしろくなくつて悲しかつた、勿體ない、とさう思つた。

だつて母様がおろそかに聞いてはなりません。私がそれほどの思をしてやう〳〵お前に教へらるゝやうになつたんだから、うかつに聞いて居ては罰があたります。人間も、鳥獣も草本も、昆蟲類も、皆形こそ變つて居てもおんなじほどのものだといふことを。

とかうおつしやるんだから。私はいつも手をついて聞きました。

で、はじめの内は何うしても人が、鳥や、獣とは思はれないで、優しくされれば嬉しかつた、

叱られると恐かつた、泣いてると可哀相だつた、そしていろんなことを思つた。其たびにさういつて母様にきいて見ると何、皆鳥が囀つてるんだの、犬が吠えるんだの、あの、猿が齒を剝くんだの、木が身ぶるひをするんだのとちつとも違つたことはないつて、さうおつしやるけれど、矢張さうばかりは思はれないで、いぢめられて泣いたり、撫でられて嬉しかつたりしい〳〵したのを、其都度母様に教へられて、今ぢやあモウ何とも思つて居ない。

そしてまだ如彼濡れては寒いだらう、冷たいだらうと、さきのやうに雨に濡れてびしよ〳〵行くのを見ると氣の毒だつたり、釣をして居る人がおもしろさうだと然う思つたりなんぞしたのが、此節ぢやもう、唯、變な蕈だ、妙な猪だと、をかしいばかりである、おもしろいばかりである、つまらないばかりである、見ツともないばかりである、馬鹿々々しいばかりである、それからみいちやんのやうなのは可愛らしいのである、吉公のやうなのはうつくしいのである、けれどもそれは紅雀がうつくしいのと、目白が可愛らしいのと些少も違ひはせぬので、うつくしい、可愛らしい。うつくしい、可愛らしい。

七

また憎らしいのがある、腹立たしいのも他にあるけれども、其も一場合に猿が憎らしかつたり、

鳥が腹立たしかつたりするのとかはりは無いので。詮ずれば皆をかしいばかり、矢張噴飯材料なんで、別に取留めたことがありはしなかつた。

で、つまり情を動かされて、悲む、愁ふる、樂む、喜ぶなどいふことは、時に因り場合に於ての母様ばかりなので。餘所のものは何うであらうと些少も心には懸けないやうに日ましにさうなつて來た。しかしかういふ心になるまでには、私を敎へるために、毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんなに苦勞をなすつて、丁寧に深切に、飽かないで、熱心に、懇に嚙んで含めるやうになすつたかも知れはしない。だもの、何うして學校の先生をはじめ、餘所のものが少々位のことで、分るものか、誰だつて分りやしません。

處が、母様と私とのほか知らないことを、モ一人他に知つてるものがあるさうで、始終母様がいつてお聞かせの、其は彼處に置物のやうに畏つて居る、あの猿——あの猿の舊の飼主であつた——老父さんの猿廻だといひます。

さつき私がいつた、猿に出處があるといふのは此のことで。

まだ私が母様のお腹に居た時分だツて、さういひましたつけ。

初卯の日、母様が腰元を二人連れて、市の卯辰の方の天神様へお參んなすつて、晩方歸つて行らつしやつた。ちやうど川向うの、いま猿の居る處で、堤防の上のあの柳の切株に腰をかけて猿

のひかへ綱を握つたなり、俯向いて、小さくなつて、肩で呼吸をして居たのが其猿廻のぢいさんであつた。

大方今の紅雀の其姉さんだの、頰白の其兄さんだのであつたらうと思はれる。男だの、女だの、七八人寄つて、たかつて、猿にからかつて、きやあ〳〵いはせて、わあ〳〵笑つて、手を拍つて、喝采して、おもしろがつて、をかしがつて、散々慰んで、そら菓子をやるワ、蜜柑を投げろ、餅をたべさすわつて、皆でどつさり猿に御馳走をして、暗くなるとどや〳〵いつちまつたんだ。で、ぢいさんをいたはつてやつたものは、唯の一人もなかつたといひます。

あはれだとお思ひなすつて、母様がお錢を惠んで、肩掛を着せておやんなすつたら、ぢいさん涙を落して拜んで喜びましたつて、さうして、

（あゝ、奥様、私は獸になりたうございます。あいら、皆畜生で、この猿めが夥間でござりませう。それで、手前達の同類にものをくはせながら、人間一疋の私には目を懸けぬのでござります。）とさういつてあたりを睨んだ、恐らくこのぢいさんなら分るであらう、いや、分るまでもない、人が獸であることをいはないでも知つて居ようと、さういつて、母様がお聞かせなすつた。

うまいこと知つてるな、ぢいさん。ぢいさんと母様と私と三人だ。其時ぢいさんが其まんまで控綱を其處ン處の棒杭に縛りツ放しにして猿をうつちやつて行かうとしたので、供の女中が口を

出して、何うするつもりだつて聞いた。母様もまた傍からまあ棄兒にしては可哀相でないかッて、お聞きなすつたら、ぢいさんにや〳〵と笑つたさうで、

（はい、いえ、大丈夫でござります。人間をかうやつといたら、餓ゑも凍えもしようけれど、獸でござりますから今に長い目で御覽じまし、此奴はもう決してひもじい目に逢ふことはござりませぬから。）

とさういつて、かさね〴〵恩を謝して、分れて何處へか行つちまひましたッて。

果して猿は餓ゑないで居る。もう今では餘程の年紀であらう。すりや、猿のぢいさんだ。道理で、功を經た、ものの分つたやうな、そして生まじめで、けろりとした、妙な顏をして居るんだ。見える〳〵、雨の中にちよこなんと坐つて居るのが手に取るやうに窓から見えるワ。

八

朝晩見馴れて珍しくもない猿だけれど、いまごんなこと考へ出して、いろんなこと思つて見ると、また殊にものなつかしい。あのをかしな顏早くいつて見たいなと、さう思つて、窓に手をついてのびあがつて、ずつと肩まで出すと澈がかゝつて、眼のふちがひやりとして、冷たい風が頰を撫でた。

爾時假橋ががた〳〵いつて、川面の小糠雨を掬ふやうに吹き亂すと、流が黑くなつて颯と出た。といつしよに向岸から橋を渡つて來る、洋服を着た男がある。

橋板がまた、がッたりがッたりいつて、次第に近づいて來る、鼠色の洋服で、釦をはづして、胸を開けて、けば〳〵しう襟飾を出した、でつぷり紳士で、胸が小さくッて、下腹の方が圖ぬけにはずんでふくれた、脚の短い、靴の大きな、帽子の高い、顏の長い、鼻の赤い、其は寒いからだ。そして大跨に、其逞い靴を片足づゝ、やりちがへにあげちやあ歩行いて來る。靴の裏の赤いのがぽつかり、ぽつかりと一ッづゝ此方から見えるけれど、自分ぢやあ、其爪さきも分りはしまい。何でもあんなに腹のふくれた人は、臍から下、膝から上は見たことがないのだとさういひます。あら！　あら！　短服に靴を穿いたものが轉がつて來るぜと、思つて、ぢつと見て居ると、橋のまんなかあたりへ來て鼻目金をはづした、澈がかゝつて曇つたと見える。

で、衣兜から手巾を出して、拭きにかゝつたが、蝙蝠傘を片手に持つて居たから手を空けようとして咽喉と肩のあひだへ柄を挾んで、うつむいて、珠を拭ひかけた。

これは今までに幾度も私見たことのある人で、何でも小兒の時は物見高いから、そら、婆さんが轉んだ、花が咲いた、といつて五六人人だかりのすることが眼の及ぶ處にあれば、必ず立つて見るが、何處に因らず、場所は限らない。すべて五十人以上の人が集會したなかには必ずこの紳

士の立交つて居ないといふことはなかつた。
見る時にいつも傍の人を誰か知らつかまへて、尻上りの、すました調子で、何かものをいつて居なかつたことは殆ど無い。それに人から聞いて居たことは嘗てないので、いつでも自分で聞かせて居る。が、聞くものがなければ獨で、むゝ、ふむ、といつたやうな、承知したやうなことを獨言のやうでなく、聞かせるやうにいつてる人で。母様も御存じで、彼は博士ぶりといふのであるとおつしやつた。

けれども鰤ではたしかにない、あの腹のふくれた様子といつたら、宛然、鮟鱇に肖て居るので、私は蔭ぢやあ鮟鱇博士とさういひますワ。此間も學校へ參觀に來たことがある。其時も今被つて居る、高い帽子を持つて居たが、何だつてまたあんな度はづれの帽子を着たがるんだらう。

だつて、目金を拭かうとして、蝙蝠傘を頤で押へて、うつむいたと思ふと、ほら、ほら、帽子が傾いて、重量で沈み出して、見てるうちにすつぽり、赤い鼻の上へ被さるんだもの。目金をはづした上へ帽子がかぶさつて、眼が見えなくなつたんだから驚いた、顏中帽子、唯口ばかりが、其口を赤くあけて、あわてて、顏をふりあげて、帽子を搖りあげようとしたから蝙蝠傘がばつたり落ちた。落こちると勢よく三ツばかりくる〳〵と舞つた間に、鮟鱇博士は五ツばかりおまはりをして、手をのばすと、ひよいと横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遙か川下の方へ慴らしく落着いた風でゆつたりしてふはりと落ちると、忽ち矢の如くに流れ出した。

博士は片手で目金を持つて、片手を帽子にかけたまゝ、烈しく、急に、殆ど數へる隙がないほど靴のうらで虚空を踏んだ、橋がかた〳〵と動いて鳴つた。

「母様、母様、母様。」

と私は足ぶみした。

「あい。」としづかに、おいひなすつたのが背後に聞える。

窓から見たまゝ振向きもしないで、急込んで、

「あら〳〵流れるよ。」

「鳥かい、獸かい。」と極めて平氣でいらつしやる。

「蝙蝠なの、傘なの、あら、もう見えなくなつたい、ほら、ね、流れッちまひました。」

「蝙蝠ですと。」

「あゝ、落ツことしたの、可哀相に。」

と思はず歎息をして呟いた。

母様は笑を含んだお聲でもつて、

「廉や、それはね、雨が晴れるしらせなんだよ。」

此時猿が動いた。

九

一廻くるりと環にまはつて、前足をついて、棒杭の上へ乘つて、お天氣を見るのであらう、仰向いて空を見た。晴れるといまに行くよ。

母様は嘘をおつしやらない。

博士は頻に指しをして居たが、口が利けないらしかつた。で、一散に駈けて來て、默つて小屋の前を通らうとする。

「をぢさん〳〵。」

と嚴しく呼んでやつた。追懸けて、

「橋錢を置いて去らつしやい、をぢさん。」

とさういつた。

「何だ！」

一通の聲ではない。さつきから口が利けないで、あのふくれた腹に一杯固くなるほど詰め込み詰め込みして置いた聲を、紙鐵砲ぶつやうにはじきだしたものらしい。

で、赤い鼻をうつむけて、額越に睨みつけた。

「何か。」と今度は鷹揚である。

私は返事をしませんかつた。それは驚いたわけではない、恐かつたわけではない。鮟鱇にしては少し顏がそぐはないから何にしよう、何に肖て居るだらう、この赤い鼻の高いのに、さきの方が少し垂れさがつて、上唇におつかぶさつてる工合といつたらない、魚より獸より寧ろ鳥の嘴によく肖て居る。雀か、山雀か、さうでもない。それでもないト考へて七面鳥に思ひあたつた時、なまぬるい音調で、

「馬鹿め。」

といひすてにして、沈んで來る帽子をゆりあげて行かうとする。

「あなた。」とおつかさんが屹とした聲でおつしやつて、お膝の上の絲屑を、細い、白い、指のさきで二ツ三ツはじき落して、すつと出て窓の處へお立ちなすつた。

「渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といつたがじれつたさうに、

「俺は何ぢやが、うゝ、知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷かで、私こんなのを聞くとすつきりする。眼のさきに見える氣にくはないものに、水をぶつかけて、天窓から洗つておやんなさるので、いつでもかうだ、極めていゝ。

鮫鯨は腹をぶく〳〵さして、肩をゆすつたが、衣兜から名刺を出して、笊のなかへまつすぐに恭しく置いて、

「かういふものぢや、これぢや、俺ぢや。」

といつて肩書の處を指した、恐しくみじかい指で、黄金の指環の太いのをはめて居る。

手にも取らないで、口のなかに低聲におよみなすつたのが、市内衛生會委員、教育談話會幹事、生命保險會社社員、一六會會長、美術奬勵會理事、大野喜太郎。

「この方ですか。」

「うゝ。」といつた時ふつくりした鼻のさきがふら〳〵して、手で、胸にかけた何だか徽章をはじいたあとで、

「分つたかね。」

こんどはやさしい聲でさういつたまゝまた行きさうにする。

「いけません。お拂でなきやアあとへお歸んなさい。」とおつしやつた。

先生妙な顔をしてぼんやり立つてたが少しむきになつて、

「えゝ、こ、細いのがないんぢやから。」

「おつりを差上げませう。」

おつかさんは帶のあひだへ手をお入れ遊ばした。

十

母様はうそをおつしやらない。博士が橋錢をおいて遁げて行くと、しばらくして雨が晴れた。橋も蛇籠も皆雨にぬれて、黑くなつて、あかるい日中へ出た。榎の枝からは時々はら〳〵と雫が落ちる。中流へ太陽がさして、みつめて居るとまばゆいばかり。

「母様遊びに行かうや。」

此時鋏をお取んなすつて、

「あゝ。」

「ねえ、出かけたつて可いの、晴れたんだもの。」

「可いけれど、廉や、お前またあんまりお猿にからかつてはなりませんよ。さう可い鹽梅にうつくしい羽の生えた姉さんが何時でもゐるんぢやありません。また落つこちようもんなら。」

ちよいと見向いて、清い眼で御覽なすつて、莞爾してお俯向きで、せつせと縫つて在らつしや

る。

さう、さう！　さうだつた。ほら、あの、いま頬つぺたを掻いて、むく〳〵濡れた毛からいきりをたてて日向ぼつこをして居る、憎らしいツたらない。

いまぢやあもう半年も經つたらう。暑さの取着の晩方頃で、いつものやうに遊びに行つて、人が天窓を撫でてやつたものを、業畜、惡巫山戯をして、キツ〳〵と齒を剝いて、引掻きさうな劍幕をするから、吃驚して飛退かうとすると、前足でつかまへた、放さないから力を入れて引張り合つた奮みであつた。左の袂がびり〳〵と裂けて斷れて取れた、はずみをくつて、踏占めた足がちやうど雨上りだつたから、堪りはしない。石の上を辷つて、ずる〳〵と川へ落ちた。わつといつた顏へ一波かぶつて、呼吸をひいて仰向けに沈んだから、面くらつて立たうとすると、また倒れて、眼がくらんで、アツとまたいきをひいて、苦しいので手をもがいて身體を動かすと唯どぶんどぶんと沈んで行く。情ないと思つたら、内に母様の坐つて在らつしやる姿が見えたので、また勢づいたけれど、やつぱりどぶん〳〵と沈むから、何うするのかなと落着いて考へたやうに思ふ。それから何のことだらうと考へたやうにも思はれる。今に眼が覺めるのであらうと思つたやうでもある、何だか茫乎したが俄に水中だと思つて叫ばうとすると水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かつた、それから悠々と水を吸つた、するとうつとり

して何だか分らなくなつたと思ふと、燦と絲のやうな眞赤な光線がさして、一幅あかるくなつたなかに此の身體が包まれたので、ほつといきをつくと、山の端が遠く見えて、私のからだは地を放れて、其頂より上の處に冷いものに抱へられて居たやうで、大きなうつくしい目が、濡髮をかぶつて私の頬ん處へくつついたから、唯縋り着いてぢつとして眼を眠つた覺がある。夢ではない。

やつぱり片袖なかつたもの。そして川へ落こちて溺れさうだつたのを救はれたんだつて、母様のお膝に抱かれて居て、其晩聞いたんだもの。

だから夢ではない。

一體助けて吳れたのは誰ですツて、母様に問うた。私がものを聞いて、返事に躊躇をなすつたのは此時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頰白だとか、山雀だとか、鮟鱇だとか、鯖だとか、蛆だとか、毛蟲だとか、草だとか、竹だとか、松蕈だとか、濕地茸だとかおいひでなかつたのも此時ばかりで、そして顏の色をおかへなすつたのも此時ばかりで、それに小さな聲でおつしやつたのも此時ばかりだ。

そして母様はかうおいひであつた。

（廉や、それはね、大きな五色の翼があつて天上に遊んで居るうつくしい姉さんだよ。）

十一

（鳥なの、母様。）とさういつて其時私が聽いた。

此にも母様は少し口籠つておいでであつたが、

（鳥ぢやあないよ、翼の生えた美しい姉さんだよ。）

何うしても分らんかつた。うるさくいつたら、しまひにや、お前には分らない、とさうおいひであつたのを、また推返して聽いたら、やつぱり、

（翼の生えたうつくしい姉さんだつてば。）

それで仕方がないからきくのはよして、見ようと思つた。其うつくしい翼のはえたもの見たくなつて、何處に居ます〳〵ッて、せツついても、知らないと、さういつてばかりおいでであつたが、毎日々々あまりしつこかつたもんだから、とう〳〵餘儀なささうなお顏色で、

（鳥屋の前にでもいつて見て來るが可い。）

そんならわけはない。

小屋を出て二町ばかり行くと、直ぐ坂があつて、坂の下口に一軒鳥屋があるので。樹蔭も何にもない、お天氣のいゝ時あかるい〳〵小さな店で、町家の軒ならびにあつた。鶏鶏なんざ、くる

ッとした、露のたりさうな、小さな眼で、あれで瞳が動きますよ。毎日々々行つちやあ立つて居たので、しまひにやあ見知顏で私の顏を見て頷くやうでしたつけ、でもそれぢやあない。

駒鳥はね、丈の高い、籠ん中を下から上へ飛んで、すがつて、ひよいと逆に腹を見せて熟柿の落こちるやうにぼたりとおりて、餌をつゝいて、私をばかまひつけない、ちつとも氣に懸けてくれようとはしなかつた、それでもない。皆違つてる。翼の生えたうつくしい姉さんは居ないのッて、一所に立つた人をつかまへちやあ、聞いたけれど、笑ふものやら、嘲けるものやら、聞かないふりをするものやら、つまらないとけなすものやら、馬鹿だといふものやら、番小屋の媽々に似て此奴も何うかして居らあ、といふものやら。皆獸だ。

（翼の生えたうつくしい姉さんは居ないの。）ッて聞いた時、莞爾笑つて兩方から左右の手でおうやうに私の天窓を撫でて行つた、それは一樣に緋羅紗のずぼんを穿いた二人の騎兵で——聞いた時——莞爾笑つて、兩方から左右の手で、おうやうに私の天窓をなでて、そして手を引あつて默つて坂をのぼつて行つた。長靴の音がぽつくりして、銀の劍の長いのがまつすぐに二ッならんで輝いて見えた。そればかりで、あとは皆馬鹿にした。

五日ばかり學校から歸つちやあ其足で鳥屋の店へ行つて、ぢつと立つて、奥の方の暗い棚ん中で、コト〳〵と音をさして居る其鳥まで見覺えたけれど、翼の生えた姉さんは居ないので、ぼん

やりして、ぽッとして、ほんたうに少し馬鹿になつたやうな氣がしい〳〵、日が暮れると歸り歸りした。で、とても鳥屋には居ないものとあきらめたが、何うしても見たくッてならないので、また母様にねだつて聞いた。何處に居るの、翼の生えたうつくしい人は何處に居るのッて。何とおいひでも肯分けないものだから母様が、

（それでは林へでも、裏の田圃へでも行つて、見ておいで。何故ッて、天上に遊んで居るんだから、籠の中に居ないのかも知れないよ。）

それから私、あの、梅林のある處に參りました。

あの櫻山と、桃谷と、菖蒲の池とある處で。

しかし、其は唯青葉ばかりで、菖蒲の短いのがむらがつてて、水の色の黑い時分、此處へも二日、三日續けて行きましたつけ、小鳥は見つからなかつた。烏が澤山居た。あれが、かあ〳〵鳴いて一しきりして靜まると其姿の見えなくなるのは、大方其翼で、日の光をかくしてしまふのでせう。大きな翼だ、まことに大い翼だ、けれどもそれではない。

十二

日が暮れかゝると、彼方に一ならび、此方に一ならび、横縱になつて、梅の樹が飛々に暗くな

る。枝々のなかの水田の水がどんよりして淀んで居るのに際立つて眞白に見えるのは驚だつた、二羽一處に、ト三羽一處に、ト居て、そして一羽が六尺ばかり空へ斜に足から絲のやうに水を引いて立つてあがつたが音がなかつた、それでもない。

蛙が一齊に鳴きはじめる。森が暗くなつて、山が見えなくなつた。

宵月の頃だつたので、曇つてたので、星も見えないで、陰々として一面にものの色が灰のやうにうるんでゐた、蛙がしきりになく。

仰いで高い處に、朱の欄干のついた窓があつて、そこが母様のうちだつたと聞く。仰いで高い處に、朱の欄干のついた窓があつて、そこから顏を出す、其顏が自分の顏であつたんだらうにトさう思ひながら破れた垣の穴ん處に腰をかけてぼんやりして居た。

いつでもあの翼の生えたうつくしい人をたづねあぐむ、其晝のうち精神の疲勞ないうちは可いんだけれど、度が過ぎて、そんなに晩くなると、いつも、かう滅入つてしまつて、何だか、人に離れたやうな、世間に遠ざかつたやうな氣がするので、心細くもあり、裏悲しくもあり、覺束ないやうでもあり、恐しいやうでもある。嫌な心持だ、嫌な心持だ。

早く歸らうとしたけれど、氣が重くなつて、其癖神經は鋭くなつて、それで居てひとりでにあくびが出た。あれ！

赤い口をあいたんだなと、自分でさうおもつて、吃驚した。

ぼんやりした梅の枝が手をのばして立つてるやうだ。あたりを眄すと眞暗で、遠くの方で、ほう、ほうツて、呼ぶのは何だらう。冴えた通る聲で野末を押ひろげるやうに、鳴く、トントントンと谺にあたるやうな響きが遠くから來るやうに聞える鳥の聲は、梟であつた。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談すのだらう、私に何を話すのだらう。鳥がものをいふと慄然として身の毛が彌立つた。

ほんたうに其晩ほど恐かつたことはない。

蛙の聲がます〳〵高くなる、これはまた仰山な、何百、何うして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身體があつて、水ン中に居て、そして聲を出すのだ。一ツ一ツ、トわなゝいた。寒くなつた。風が少し出て、樹がゆつさり動いた。

蛙の聲がます〳〵高くなる。居ても立つても居られなくッて、そつと動き出した。身體が何うにかなつてるやうで、すつと立ち切れないで蹤つた、裙が足にくるまつて、帶が少し弛んで、胸があいて、うつむいたまゝ天窓がすわつた。ものがぼんやり見える。

見えるのは眼だトまたふるへた。

ふるへながら、そつと、大事に、內證で、手首をすくめて、自分の身體を見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思はずキヤッと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。

此時、背後から母樣がしつかり抱いて下さらなかつたら、私何うしたんだか知れません。其はおそくなつたから見に來て下すつたんで、泣くことさへ出來なかつたのが、

「母樣！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟ん處へかじりついて仰向いてお顏を見た時、フット氣が着いた。

何うもさうらしい、翼の生えたうつくしい人は何うも母樣であるらしい。もう鳥屋には、行くまい。わけてもこの恐しい處へと、其後ふつつり。

しかし何うしても何う見ても、母樣にうつくしい五色の翼が生えちやあ居ないから、またさうではなく、他にそんな人が居るのかも知れない、何うしても判然しないで疑はれる。

雨も晴れたり、ちやうど石原も辷るだらう。母樣はあゝおつしやるけれど、故とあの猿にぶつかつて、また川へ落ちて見ようか不知。さうすりやまた引上げて下さるだらう。見たいな！　羽の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母樣が在らつしやるから、母樣が在らつしやつたから。

凱旋祭

一

柴の幕、紅の旗、空の色の青く晴れたる、草木の色の緑なる、唯うつくしきものの彌が上に重なり合ひ、打混じて、譬へば大なる幻燈の花輪車の輪を造りて、烈しく舞出で、舞込むが見え候のみ。何をか緒として順序よく申上げ候べき。全市街は其日朝まだきより、七色を以て彩られ候と申すより他はこれなく候。

紀元千八百九十五年一月一日の凱旋祭は、小生が覺えたる觀世物の中に最も偉なるものに候ひき。

知事の君をはじめとして、縣下に有數なる顯官、文官武官の數を盡し、有志の紳商、在野の紳士など、盡く銀山閣といふ倶樂部組織の館に會して、凡そ半月あまり趣向を凝されたるものに候よし。

先づ巽公園内にござ候記念碑の銅像を以て祭の中心といたし、こゝを式場にあて候。

この銅像は丈一丈六尺と申すことにて、臺石は二間に餘り候はむ、兀如として喬木の梢に立ち

をり候。右手に提げたる百錬鐵の劍は霜を浴び、月に映じて、年紀古れども鏽色見えず、仰ぐに日の光も寒く輝き候。

銅像の頭より八方に綱を曳きて、數千の鬼灯提灯を繋ぎ懸け候が、これをこそ趣向と申せ。一ツ一ツ皆眞蒼に彩り候。提灯の表には、眉を描き、鼻を描き、眼を描き、口を描きて、人の顏になぞらへ候。

さて目も、口も、鼻も、眉も、一樣普通のものにてはこれなく、いづれも、ゆがみ、ひそみ、まがり、うねりなど仕り、なかには念入にて、醉狂にも、眞赤な舌を吐かせたるが見え候。皆切取つたる敵兵の首の形にて候よし。されば其色の蒼きは死相をあらはしたるものに候はむか。下の臺は、切口なればとて赤く塗り候。上の臺は、尋常に黑くいたし、辮髪とか申すことにて、一蕨繩にてぶら〳〵と釣りさげ候。一ツは仰向き、一ツは俯向き、横になるもあれば、縱になりたるもありて、風の吹くたびに動き候よ。

二

催の恁ることは、たゞ九牛の一毛に過ぎず候。凱旋門は申すまでもなく、一廓數百金を以て建られ候。恰も記念碑の正面にむかひあひたるが見え候。また其傍に、これこそ見物に候へ。こ

こに三抱に餘る山櫻の遠山櫻とて有名なるがござ候。其梢より根に至るまで、枝も、葉も、幹も、すべて青き色の毛布にて蔽ひ包みて、見上ぐるばかり巨大なる象の形に拵へ候。

毛布はすべて旅團の兵員が、遠征の際に用ゐたるをつかひ候よし。其數八千七百枚と承り候。長蛇の如き巨象の鼻は、西の方にさしたる枝なりに二蜿り蜿りて喞筒を見るやう、空高き梢より樹下を流るゝ小川に臨みて、いま水を吸ふ處に候。脚は太く、折から一員の騎兵の通り合せ候が、兜形の軍帽の頂より、爪の裏まで、全體唯其前脚の後にかくれて、纔に駒の尾のさきのみ、此方より見え申し候。かばかりなる巨象の横腹をば、眞四角に切り開きて、板を渡し、こゝのみ赤き氈を敷詰めて、踊子が舞の舞臺にいたし候。葉櫻の深翠したゝるばかりの頃に候へば、舞臺の上下にいや繁りに繁りたる櫻の葉の洩れ出で候て、舞臺は薄暗く、緋の毛氈の色も黒ずみて、もののしめやかなるなかに、隣國を隔てたる連山の巓遠く二ツばかり眉を描きて見渡され候。遠山櫻あるあたりは、公園の中にても、眺望の勝景第一と呼ばれたる處に候へば、式の如き巨大なる怪獸の腹の下、脚の四ッある間を透して、城の櫓見え、森も見え、橋も見え、日傘さして橋の上渡り來るうつくしき女の藤色の衣の色、恰も藤の花一片、一片の藤の花、いと〳〵小さく、ちらちら眺められ候ひき。

こは月のはじめより造りかけて、凱旋祭の前一日の晝すぎまでに出來上り候を、一度見たる時

のことに有之候。

夜に入ればこの巨象の兩個の眼に電燈を灯し候。折から曇天に候ひし。一體に樹立深く、柳松など生茂りて、くらきなかに、其蒼白なる光を洩し、巨象の形は小山の如く、喬木の梢を籠めて、雲低き天に接し、朦朧として、公園の一方にあらはれ候。時こそ怪獸は物凄まじき其本色を顯し、雄大なる趣を備へてわれ〳〵の眼には映じたれ。白晝はヤハリ唯毛布を以て包みなしたる山櫻の妖精に他ならず候ひし。雲はいよ〳〵重く、夜はます〳〵闇くなり候まゝ、炬の如き一雙の眼、暗夜に水銀の光を放ちて、この北の方三十間、小川の流一たび灌ぎて、池となり候。池のなかばに、五條の噴水、青龍の口よりほとばしり、なかぞらのやみをこぼれて篠つくばかり降りかゝる吹上げの水を照し、相對して、またさきに申上候銅像の右手に提げたる百錬鐵の劍に反映して、次第に黒くなりまさる漆の如き公園の樹立の間に言ふべからざる森嚴の趣を呈し候、いまにも雨降り候やうなれば、人さきに立歸り申候。

三

あくれば凱旋祭の當日、人々が案じに案じたる天候は意外にもおだやかに、東雲より密雲破れて日光を洩し候が、午前に到りて晴れ、晝少しすぐるより天晴なる快晴となり澄し候。

さればこそ前申上げ候通り、たゞうつくしく賑かに候ひし、全市の光景、何より申上げ候はむ。こゝに繰返してまた單に一幅わが縣全市の圖は、七色を以てなどりて彩られ候やうなるおもひの、筆執ればこの紙面にも浮びてあり〳〵と見え候。いかに貴下、左樣に候はずや。黄なる、紫なる、紅なる、いろ〳〵の旗天を蔽ひて大鳥の群れたる如き、旗の透間の空青き、樹々の葉の翠なる、路を行く人の髪の黑き、簪の白き、手絡の緋なる、帶の錦、袖の綾、薔薇の香、伽羅の薫の薫ずるなかに、この身體一ツはさまれて、歩行くにあらず立停るといふにもあらで、押され押され市中をいきつくたびに一歩づゝ式場近く進み候。横の町も、縱の町も、角も、辻も、山下も、坂の上も、隣の小路もたゞ人のけはひの轟々とばかり遠波の寄するかと、ひッそりしたるなかに、或は高く、或は低く、遠くなり、近くなりて、耳底に響き候のみ。裾の埃、歩の砂に、兩側の二階家の欄干に、果しなくひろげかけたる紅の毛氈も白くなりて、仰げば打重なる見物の男女が顔も朧げなる、中空にはむら〳〵と何にか候らむ、陽炎の如きもの立ち迷ひ候。

萬丈の塵の中に人の家の屋根より高き處々、中空に斑々として目覺しき牡丹の花の飜りて見え候。こは大なる母衣の上に書いたるにて、片端には彫刻したる獅子の頭を縫ひつけ、片端には絲を束ねてふつさりと揃へたるを結び着け候。この尾と、其頭と、及び件の牡丹の花描いたる母衣とを以て一頭の獅子にあひなり候。胴中には青竹を破りて曲げて環にしたるを幾處にか入れて、

竹の兩はしには屈竟の壯佼居て、支へて、膨らかに幌をあげをり候。頭は一人の手して、力逞ましきが猪首にかゝげ持ちて、朱盆の如き口を張り、またふさぎなどして威を示し候。都度、仕掛を以てカツ〳〵と金色の牙の鳴るが聞え候。尾のつけもとは、こゝにも竹の棹つけて支へながら、人の軒より高く突上げ、鷹揚に右左に振り動かし申候。何貫目やらむ尾にせる絲をば、眞紅の色に染めたれば、紅の細き瀧支ふる雲なき中空より逆におちて風に搖らるゝ趣見え、要するに空間に描きたる獸王の、花々しき牡丹の花衣着けながら躍り狂ふにことならず、目覺しき獅子の皮の、かゝる牡丹の母衣の中に、三味、胡弓、笛、太鼓、鼓を備へて、節をかしく、且つ行き、且つ鳴して一ゆるぎしては式場さして近づき候。母衣の裾よりうつくしき衣の裾、ちひさき女の足などこぼれ出でて見え候は、歌妓の上手をばつどへ入れて、この樂器を司らせたるものに候へばなり。

おなじ仕組の同じ獅子の、唯一つには留まらで、主立つたる町々より一つ宛、すべて十五六頭遂り出だし候が、群集のなかを處々横斷し、點綴して、白き地に牡丹の花、人を蔽ひて見え候。

四

群集ばら〳〵と一齊に左右に分れ候。

不意なれば蹌踉めきながら、おされて、人の軒に仰ぎ依りつゝ、何事ぞと存じ候に、黑き、長き物ずる〳〵と來て、町の中央を一文字に貫きながら矢の如く駈け拔け候。

これをば心付き候時は、ハヤ其物體の頭は二三十間わが眼の前を走り去り候て、いまは其胴中あたり連りに進行いたしをり候が、恰も凧の絲を繰出す如く、走馬燈籠の間斷なきやう俄に果つべくも見え申さず。唯人の頭も、顏も、黑く塗りて、肩より胸、背、下腹のあたりまで、墨もていやが上に濃く塗りこくり、赤褌襠着けたる臀、脛、足、踵、これをば朱を以て眞赤に色染めたるおなじ扮裝の壯佼たち、幾百人か。一人行く前の人の後へ後へと繫ぎあひ候が、繰出す如くずん〳〵と行き候。およそ半時間は連續いたし候ひしならむ、やがて最後の一人の、身體黑く足赤きが眼前をよぎり候あと、またひら〳〵と群集左右より寄せ合うて、兩側に別れたる路を塞ぎ候時、其の過行きし方を打眺め候へば、彼の怪物の全體は、遙なる向の坂をいま蜿り〳〵のぼり候首尾の全きを、いかにも蜈蚣と見受候。あれはと見る間に百尺波狀の黑線の左右より、二條の砂煙眞白にぱッと立つたれば、其尾のあたりは埃にかくれて、躍然として擡げたる其臼の如き頭のみ坂の上り盡くる處雲の如き大銀杏の梢とならびて、見るがうちに、またゞ七色の道路のみ、獅子の背のみ眺められて、蜈蚣は眼界を去り候。疾く既に式場に着し候ひけむ、風聞によれば、市內各處に於ける勞働者、たとへばぼてふり、車夫、日傭取などいふものの總人數をあげ

たる、意匠の俄に候とよ。

彼の巨象と、幾頭の獅子と、この蜈蚣と、この群集とが遂に皆式場に會したることをおん合の上、靜にお考へあひなり候はば、いかなる御感じか御胸に浮び候や。

五

別に凱旋門と、生首提灯と小生は申し候。人の目鼻書きて、靑く塗りて、血の色染めて、黑き蔴繩着けたる提灯と、龍の口なる五條の噴水と、銅像と、この他に今も眼に染み、腦に印して覺え候は、式場なる公園の片隅に、人を避けて悄然と立ちて、淋しげにあたりを見まはしをられ候、一個年若き佳人にござ候。何といふいはれもあらで、薄紫のかはりたる、藤色の衣着けられ候ひき。

このたび戰死したる少尉B氏の令閨に候。また小生知人にござ候。

あらゆる人の嬉しげに、樂しげに、をかしげに顏色の見え候に、小生はさて置きて夫人のみあはれに悄れて見え候は、人いきりにやのぼせたまひしと案じられ、近う寄り聲をかけて、もの問はむと存じ候折から、おッといふ聲、人なだれを打つて立騷ぎ、悲鳴をあげて逃げ惑ふ女たちは、水車の齒にかゝりて撥ぬ飛ばされ候やう、倒れては遁げ、轉びては遁げ、うづまいて來る大

蜆蚫のぐるぐると巻き込むる環のなかをこぼれ出で候が、令閨とおよび五三人は其中心になりて、十重二十重に巻きこまれ、遁るゝ隙なく伏まろび候ひし。警官駈けつけて後、他は皆無事に起上り候に、うつくしき人のみは、其まゝ裳をまげて、起たず横はり候。塵埃の其つやゝかなる黒髪を汚す間もなく、衣紋の亂るゝまもなくて、恁うはなりはてられ候ひき。

むかでは、これがために寸斷され、此處に六尺、彼處に二尺、三尺、五尺、七尺、一尺、五寸になり、一分になり、寸々に切り刻まれ候が、身體の黒き、足の赤き、切れめ〳〵に酒氣を帶びて、一つづゝうごめくを見申し候。

日暮れて式場なるは申すまでもなく、十萬の家軒ごとに、おなじ生首提灯の、しかも丈三尺ばかりなるを揃うて一齊に灯し候へば、市内の隈々塵塚の片隅までも、眞蒼き晝とあひなり候。白く染め拔いたる、目、口、鼻など、大路小路の地の上に影を宿して、青き灯のなかにたとへば蝶の舞ふ如く蠟燭のまたゝくにつれて、ふは〳〵と其幻の浮いてあるき候ひし。ひとり、唯、單に、一宇の門のみ、生首に灯さで、淋しく暗かりしを、怪しといふ者候ひしが、さる人は皆人の心も、ことのやうをも知らざるにて候。其夜更けて後、俄然として暴風起り、須臾のまに大方の提灯を吹き飛ばし、殘らず灯きえて眞闇になり申し候。闇夜のなかに、唯一ツ凄まじき音聞え候は、大木の吹折られたるに候よし。さることのくはしくは申上げず候。唯今風の音聞え候。

何につけてもおなつかしく候。

月　日

ぢい　様

堅パン

一

「入らつしやい！」

權の野郎が其聲といつたらない、腸を絞り出して打ッつけるやうな音であるから、客を呼ぶやうな容易なことではない、乘車を勸めるといふやうな手輕なものではない。

まるで其九段の上に群つてる人を、坂下の總井戸の處に居て、引摑んで胸倉を取つて、ずるずるずると馬車の中へ引摺込まうとする聲だ。恐しい聲だ。

だもんだから、華奢な婦人や、優しい男の客はないので、ギッシリ十二人詰込んだのは、皆逞しい野郎と、肥滿女ばッかり。

札切の權の野郎は、あんぺら帽子に古外套、松の木の根ッ子のやうに節くれだつた、繼はぎの長靴で、肩から革鞄をぶらさげてる。

此革鞄がまた唯革鞄とばかりいつたつて分るんぢやない。

着て居る洋服は切た。切てさへ霜に凍てて、雨に濡れて、からッ風で乾き切ッて、砂まぶしに

なつて、天日で固まつて、權のアノ丈夫な手足に筋鐵が入つて居なかつた分には、得て屈曲しないほど堅くなつてるのに、況して革だ。革鞄はカン〳〵になつて鐵のやうで赤錆に錆びてるんだ。而して金具だけ光つて居る。權の天窓から爪先まで砂に塗れて、ふすぼり切つて居るもんだから、殊に目に立つて光つて居る。金具とモ一ッ光るのは權の眼だ。

この眼でギロリと馬車ン中眴したが、次手だ、モ一人二人推込めと、少し發車を見合して、件の聲で、

「入らつしやい！」と叫んだ。

「先生、慾張るな、出せ、出せ。」

何、これしきの聲に恐れるやうな客種ぢやあない、二三人で同音でいつた。

「直ぐ出ます。今だ。」

といつて、權は催促を避けて前へ廻つた。

「權やい、廢せてッたらやい。見ッとむねえ、往來だ。」

と高い處でものをいふ、天窓は勸工場の旗竿の尖と同一位な處にある。坂下兩側の家を踏跨いで、宙に體を据ゑた、逆八文字に大きな靴の裏を飜して、細卷のシガレットを吹して居る、澄したもので、これは、御存じでもあらうが、馭者の先生。

權は眼を光らして上を向いた。
「食ふんぢやねえ、嚙潰して吐出すんだい。」と肩を聳やかしていつた。
左樣だ。
わんぐりと口をあけて、脇腹から垂れ下つてる衣兜の中から、神田一ツ橋名代の堅パンを出して、權は客を呼ぶ隙にやカツチリ〳〵やつてるが、さうだ、食べるんぢやあない。
前齒で留めて、右の手で折ツぺしよツて、奥齒で嚙碎いちやあ吐出すんだい。さうだ、靴の尖へぶツかけて、一片踏躪つちやあ、別のを吐出してまた踏んでるんだ。
「なほ不可や、止せ、狂氣染みてる！」
と馭者は卷煙草の飲さしを打つちやつて、鞭を執りながら俯向いて眉を顰めた。
ちやうど此時思出したやうに、
「入らつしやい！」
と叫んだのが、首尾よく客を二人引摺り込んで、馬車の中へ叩き入れた。此聲は立派に權をして成功せしめたので。
「勝手にしやあがれ。」
と權は投出したやうにいひすてて後へまはつた。

「畜生ぶり〳〵して居らい。どッ。」
ひたりと捌くと、二手綱で馬が動き出して、馬車はゆるやかに一つまはつた。ぐいと出る。
ちやうど晩方のことだつた。

二

日が暮れる、夜になつて安泊へ歸つて、飯を喰つて、一風呂浴びながら其處等ぶら〳〵して、歸ると、皆寢て居る、起きてるのは三疊にお麗さんたつた一人だ。
奉公人なしの一人働きで、朝から晩まで苦勞をし通しで、やう〳〵、水仕事をしまつてから、薄暗い行燈の影で針仕事をぽつ〳〵して居る。束髪の銀かんざしだ。半襟のかゝつた頸の白い、手のきれいなのに、一昨日の晩までは、毎晩好な堅パンを二ツづゝ買つて、戻つて、ソツとやつて、莞爾笑つて戴くのを見て、飛んで歸つて、毛布に潜つて、丸くなつて寢たつけが、昨夜嫁入をしちまつた——プツと堅パンを碎いて居たのを吐き出した。權の强い齒だつても、このパンの堅いのを碎くのだから嚙占めたはずみで、吐出したあとに、キリ〳〵と齒が鳴つてる。
一ツ吐出してからまた喰ひかゝらうとするトタンに俎橋へ乘り懸けたから、權は飛んで下りた。
そして橋向うまで吶喊した。

これで第一の難處は濟んだので、これから大難處にかゝらうとする、がた馬車はこれからだ。
一體九段から萬世橋まで行く間に、この馬車に取つて三處の切所、蓋し難場がある。
第一は今いつた俎橋で、俎橋の交番を過ぎることだ。
これは定員十二名の他に二三人も詰込んで通るのを、惡くすると査官に見つかるからで。しかし何、赤馬車に乘らうといふ身で、硝子越に往來を瞰下すでもあるまい、生意氣に天窓を持上げようとするから間違つてると、こつそり乘の分は定員の列した膝の上へ面をおつつけさして置けばそれで濟む。
第三は港口で破船の格、これはまた危いけれど、ほんの一呼吸で、そこは馴れてるから案じるほどのことはないので、別でもない、淡路町から萬世橋へ出ようとして、馬車が半月形にぐるりと廻る處の、直徑八尺、幅六尺ばかりの地の窪溜、些少な難だ。
然るに其第二の難處、これが容易でないのである。卽ち一ツ橋外一圓の惡臭、大惡臭といつても宜い、アノまた匂といつたらない。塵芥捨場が庫のやうに並んで居る處へ、秣の臭氣と、馬糞牛糞、それ溝の匂、恐らく東京府の惡臭を一處へ吹寄せた位のもので、風船に乘つてたら知らず、空中、三十立方尺の間といふものは、唯芥々として一種異樣の惡臭が充滿てる無上の難場だ、雨上りの日あたりや、むし〳〵と蒸す時や、陽炎の立つ時などといつたら、言語道斷、人も、馬も

あれでもつて打つ倒す。
こゝへ乘りかけたとなると、唯盲打の捨鞭で、馬、空を駈けるにあらざるよりは、他にこれを防ぐの方法がない。
で、大きくいへば島國の一處に曲線を描いて龍卷のやうに砂煙が立つといつて構やしない。
まつしぐらに駈けて來た。
一團の紅塵のかぶさつて、唯馭者の鳥打帽と、車の形とが朦朧として見ゆるばかり、恰も煙に乘つて風に吹飛ばされながら、ぐる〳〵、ぐる〳〵、わに廻つて飛ぶやうで、一砂あびる、とまツ黑になつて、隱れつちまつて、遠くの河岸へ馬車の横腹が顯れる。神田橋から二三町手前の處で、バツタリ留つた。馬が動かなくなつたんだ。
いま一呼吸乘り拔けると、早く既に惡臭界を脫して、神田橋で一寸休んで、それからあとは錦町の二等道路を眞直に駈けるので、此時は棄鞭で遁げを打つのでない。坦砥の如き大路の眞中を宙に飛んで走るのだから馭者の先生得意の時だ。此得意でもつて、やゝ惡臭ぬけの困難を取返すんだのに、こゝで馬に留られては叶はない。しかも塵芥は立つ、西日はさす、むせかへるやうな酷い臭氣で、呼吸もつけない。

三

砂埃は浴びて居る、ぽか〳〵した惡暖いお天氣で、西日が射すので、氣味の惡い汗は出る、目も、鼻も、唇も唯じやり〳〵して咽せるやうな處へ、其惡臭を吸つて惱むんだから、お麗さんに嫁入をされて、失望して、昨夜ッから一眼も寢ないで、懊惱を極めて居る權の天窓は苦痛に堪へない。氣が違ひさうだ。

「何うしたんだ、何うしたんだ、何うしたんだ。」

と足踏をした。

かう詰られるまでもない、馭者も一秒と雖もこゝに停滯するに得堪へぬのだから、前刻にから百方術を講じて居るけれども、疲れ切つた馬は到底こゝまで來た後のこの重量を曳くに堪へないので、二頭とも身震をして、カラ足を踏むばかりだ、埒はない。

「小じれつてえ！　コン畜生。」

權は突進して前へ出て、いきなり縱横に鞭の刻まれてる拳を握つて、馬の横面を一ッ打つた。

「どッ畜生。」

と怒まいた。氣ばッかりあせつてるから、續樣にモ一ッはりのめしかゝつたが、勢ではずみを

くッて、鼻面を掠めた拳が空を打つて、權はツンのめらうとして踏こたへたが、一人で腹を立つて、眞赤になつて呼吸ついてる。

「ヨイショ。」と客の一人がいつた。

皆で哄と笑つた。

馭者臺から悠々と瞰下して、

「駄目だ。權、そんなことで動くもんか、それ。」

といつて、右の手を高く空に翳して、左で手綱を引詰めると、同時に鞭はピューと風を切つて、蒼空高き處に圓を描いたが、しつかり馬の急所にあたつた。

摺り剝けてる赤ッちやけた背骨から太腹へたら〳〵と汗を流して、鬣を震ふと見ると、前足をもがいて跳ね上つたが、車は前へ出ないで横に震動した。凄まじい搖れ方だ。

但しこんなことで驚くやうな据らない膽では、到底此馬車に乘れはしないんだから、十四員の乘客自若として、次から次へゴッ〳〵と天窓同士打つ附けた。

また先刻の聲で、

「ヨイショ。」

「賴むぜ。」とか何とかいふ、澄したものだ。

「それ不可えや、この手で行かないけりや、とても不可えんだ。」
馭者は斷念めたものらしい。
「ウヌ……」
立つて睨みつけた權は、兩手を揃へて、躍りかゝつて、どんと打つた。矢聲を揚げて、
「何だッ。」
びくとも動かない。
「ヨイショ。」
と此時また囃した。乘合がまた哄然と大笑する。
馭者も微笑を洩して、
「權、コイツアあきらめもんだぜ。」
「馬鹿ア、何だつて、コン畜生。」
瞳を据ゑてぢつと見る、太い眉に猿眼がきらめいた。唇を嚙んで、黑い顏の、眼の下に朱を灌いで、また握拳でじりゝと寄る。
「止せ、止せ、腕ッ節が折けたッて、さしあたりこいつが動くかい。度胸を据ゑろ。コ、權、この臭氣だッて意地になつて此方で吸込んでやりゃ忘れッちまはあ。お互にまはり合せよ、しかし

堪つたもんぢやあねえ、が、何うするもんだ。」
と高い處で大欠伸をして、力拔けがしてるらしい。
「左樣さ。こりや、あせつたつて仕樣がござんすまい。このまんまで一日逗留をしようぢやありませんか。立ン坊に使をさして晩飯でも取寄せませう。」と恐しく暢氣な客人がある。
また、
「ヨイショ。」といつた、高笑の聲がする。トタンに權は胸を打つて考へついた。立つたまゝ土足をあげて、二ッ三ッ馬の足を蹴飛ばした。が、一向效きめが無いので、左の足の長靴を脫っ放して、アノ化石したやうな堅いのを振冠つて、身を以てまつくろに馬のどてッぱらへ打つかつた。續樣に唯もう盲打に打ちのめすのだ、靴が躍ると、外套の裾が風にあふつて、飛つくので砂を蹴立つて、赤黑い一團の煙の中に惡鬼羅刹が狂ふやうだ、權の眼は血走つてる。
そしてどうと打つかる毎に、泡を吐いて、首を垂れて、あへぎ切ッてる馬がびくくする。
「コン畜生！　コン畜生、コン畜生、すべつため。」と砂煙の中で叫んだ。凄まじい聲だ。
「權、おい、馬はお麗さんぢやあねえッてことよ。おい、權、野郎、何うしやがつた。」
と馭者臺から眞黑な砂の中へ憂慮つて聲を懸けた、其が聞えたらしい。
「畜生だい、コン畜生だい！」

四

モ一度繰返していふが、權の堅パンは食べるんぢやあない。前齒で銜へて、右の手で折ッぺしよッて、奥齒で嚙碎いちやあ吐出すんだ。吐出したあとで齒を鳴すんだ。

これはお麗さんが嫁入をしたからだ。權が嚙碎いちやあ吐出して、靴の尖で蹂躙る堅パンは、蟲の故か――あんなに弱々しい、霞を呑んでも咽喉に詰りさうな、花の露を吸つても咽せ入りさうな、華奢なお麗さんが――大の好物で、嫁入をする前の晩まで、毎晩々々權の野郎が買つてつちやあ、行燈の影で一人白い手で、うつむいてしよんぼりして、針仕事をしてる處へ貢いぢやあ、恐しく嬉しがらせたものだつた。

可哀さうに、權は何うかしたのに違ひない。河岸で馬が留つた時長靴でぶんなぐつた樣子なんざ、全くアノ野郎無茶苦茶になつたんだ、亂暴になつたんだ、酷くなつたんだ、何うでもしろといふ氣なんだ。

それでもまだ馬は動き得はしなかつたが、最後の大打擊ぢやあ何うしたもんか、跳ね上つて駈け出した。唯もうはずんだ車に突飛ばされて、馬は萬世橋まで飛んだので、馭者が高い處で茫乎して手をひろげたのは此時ばかり。俄でも大の字なりになつて空を駈けたやうに思ふ、眼が眩ん

だと然ういつた。

權は片一方の靴をなくして居た。そして兩掌で角の尖つた石ころを碎けよと摑つて居た。さうだ、あとのぶんなぐりはこれでしたのである。石は血に染んで居た。馬もさうだが、水牛の皮のやうに厚くつて堅固て居る權の掌も打ッきれて居た、野蠻極まるわけだ。

其癖萬世橋が暗くなつて、電燈が蒼い光を放つて、ちら〳〵とあかりがつき、冷い夜風が吹いて、空が拭つたやうに晴れた時、降るやうな星の下で、權は少し氣が靜まると、馬の鬣へ拐りついて、頰ッぺたをおッつけた。

「堪忍しろよ、惡かつた。」

といつてはら〳〵と落涙したもの。それだから權は可哀相だと、皆が然う思つてるんだ。

五

で、少し落着いたら止めれば可いのに、寄つてたかつて何てッて聞かしても、堅パンを嚙碎いちやあ吐き出すことをよさうとしない、矢張權は何うかしたんだ。

と皆が憂慮つて居るうちに、ふいと夥間の內に見えなくなつて、何處かへ姿をかくしッちまつた。行方が知れない。確に權は何うかして居る。

權が居なくなつて三月ばかり經つと、淺草の見世物小屋へ看板が出た。

唯見る、手を拱いて胡坐を組んだ夜叉の如き顏のものが、天窓の上へ七輪をのッけて石炭を燒いて鐵鍋をかけて油を煮て居る。黑煙が渦を卷いて立つ中から、ちよろ〳〵と嘗めまはす毒龍の赤い舌が見えて、沸騰した油の澈が粉微塵になつて、眞白なのに艶を帶びて、透通るやうになつて、舞臺一面に降り灌いで居る處であつた。印度人の奇藝である、手品ではない、西洋輕業でも何でもない。

渠等一種の迷信から、文覺の荒行と一般、殆ど豫想し得べからざる、慘絕、酷絕の刑法を罪滅のために自分で自分の身體に試みるので、腕に穴をあけて菩提樹の枝に通して梢から倒にぶらさがつて、肉が切れてガンヂス河へ落ちるのを待つて、鰐のために食はれるやうな伯父さんを本國に持つて居る、印度人、ヂョン某といふのであるから、ものは試だ、

といふ口上。

丸塚山に犬山道節忠與が假の名、寂寞道人賢柳の火定あつてより以來、江戸にない見物である。聞けば群集の見る前で、左の頰から右の頰までづぶりと疊さしの眞鍮針を突刺して見せるさうだ。手へ小刀を貫くさうだ。踵に五寸釘を打込まして、自若として居るさうだ。

それさへ前藝だといふものを、本藝はさてどんな事をするだらう。

と黑山の樣な人立で、立錐の餘地もない大入だつた。

馭者がものずきで入つて見た。

一人居る脊の高い印度人が、緋羅紗の短服を着て、上衣つけずの黑のズボンで、天窓に焦茶色の布を卷いた、恐しく眼の光る、唇の厚いのが、重ッくるしい、まはらぬ舌で、

「あッちゆい、本藝。旦那入らつしやい。入らつしやい。一ッ三ッ七ッ九ッ六ッ五ッ、違ひました、九ッ二ッ一ッ三ッ四ッ、違ひました、五ッ十ウ二ッ三ッ七ッ八ッ六ッ、違ひました。one. two. three. four. five. six。覺えました一ッ二ッ三ッ」

などといつちやあ笑はしてる。すると傍から眼の小さな、額の狹い、嘴の尖がつた日本人が、裁着袴の紺足袋穿、拍子木で指して、据眼で見物を見ながら、

「こゝが可愛い處でございます、鐵船から出まして、長崎から當淺草へ參つたばかり、まだものの數も分りませぬ、トンチンカンで、ございまするゆゑ、トンチンカンだと申しますると、私トンチンカン、嬉しい。旦那難有う、などとやります。罪のない處を取得に御贔屓下さりまするやう。」

と口上を略していつて、いよ〳〵頰ぺた抉りの一藝を取立てることになつて、舞臺正面へ手を取つて連れ出したのは、顏は肖て居るが體軀の低い、扮裝の汚ない小男で、これが總一座の太夫

ジョン某といふのである。が、まるで氣抜がしたといふ風で、眼が据わらない。よた〳〵しちやあ唯殆ど無意識に、器械的に口をあけて、堅パンを前齒でくはへて、右の手で折ッぺしよッて、奥齒で嚙碎いて吐出しちやあ、舞臺に踏づけて、あとで齒を鳴すので、駅者は、啊呀といつた。

權である。權の野郎だ。

が、もうあゝなつちやあ、痛い事も、苦しい事も、熱いことも、知らないのであらう。分らないのであらう。

けれども頰ぺたへ穴をあけようとしたから、見て居るに忍びない。後は後のこととして、駅者は激昂して、群集を突のけて猪のやうに飛び出した。

木戸を出ようとして、フと見ると驚いた。權は堅パンを嚙んぢやあ吐き出してるのに、木戸に坐つた、肥滿した絹布ぐるみの勸進元が、ちやうど支度をして居たが、大入大人氣の祝であらう、辨當が、何だ、お煮染に赤飯なんだ、煮染に赤飯だつた。

さゝ蟹

一

彫刻師廣常歿してのち、三月春寒き頃、渠が生前に使ひし一切の道具賣物になりて人手に渡りたり。

渠が親しかりしといふ夥間、七八名、手を分ちて、點數を整へ、價格を定めて、適宜にこれを分配しつ。二十三日の朝よりはじめて、日の暮方に萬事を了りぬ。

家には一人の男兒ありしかど、亡き人の記念を散ずるを、坐して傍にありて見るに忍びずとて、出でて其の日は歸らず。年紀六十にあまりたる、廣常の母なる媼、一人居て留守したりき。朝な夕な打對ひたる、細工の盤の欅なりしを、二面、疊屋が仕事しまひて、臺を擔ぎて歸るやう黄昏に肩に乘せて、少き買手の門を出去りしが最後にて、暗くなりたれば蔀をおろしつ。

媼は佛壇に灯して、默然として坐してうなだれたり。

淋しかるべし。

簞笥、長持は無き所帶の、店も、奥も、細工場は固よりなり。盤箱、鑢、鏨槌、鑷盤、磨棒、

藥研の類、あらゆる道具を以て充されたるを、唯一日にして銀の鋼線、鐵の鑢粉、銅の削屑まで、拂くが如く賣拂ひし、鞴をまで掘返して、取去りたる土間の跡は、大なる黑き穴となりて、こゝより風の吹出づらむ、一道の冷氣陰々として戸障子の骨に徹すなり。

侘しきは其のみかは。

佛壇据ゑたる、六疊の疊、五疊の數は、燭の灯影あざやかに照り添ひて、蒼波かとばかりうつくしきに、一疊のみは疊無くて、朽ちたる床露れたり。

金銀の細工するものの、塵の屑、鑢の粉、自からあたりに散りて、疊の目に染むぞとよ。加ふるに去にし年、廣常健なりける程、第何回の硐なりけむ、帝國博覽會の美術館に出品するとて、地球形の香爐造りし時、朧銀の地金をば、彼の鞴にて鑄たりしに、下職人の壯者の、湯床の加減をあやまりたれば、爐茶碗の中に熱し鎔けたる、五貫目にあまれる金屬の、水に浸りて、二ツ三ツごと〳〵といひしほどこそありけれ、凄じき響して、地を貫き、天井を穿ち、微塵になりて、紛亂して、四邊は宛然暗の雪の、吹雪溜りとなれりし事あり。跡片付けて掃除するとて、彼の職人、物蔭にて、これが何の面白き、高等脇挾んで、手を開き、足拍子踏み鳴して、密に天狗舞を躍りしが、今日の買人に交りしとか。

かゝれば細工場の疊には、多量の金目ありて、塵の中に交りつべしとて、研屋といふ、磨汁な

ど買ひて金銀にふき分くる業するが、床も表も新らしき疊と交易せむとて、六枚の古疊を一車にして撤し去りしが、約をば果さず。收益思ひのまゝならず、引合はぬ損したりとて、かく一疊を空しくせるなり。

夜半には枕も凍りけむ、病めりし人も長きあひだ、三冬の夜をこゝに病臥しき。媼もこゝに寢まるぞかし。

題目唱へて爪繰りたる、數珠の總を頭に捻りて、媼は靜に押戴き、少しく聲をうるましぬ。

「松操院清鶴、日喬居士、むづかしいから、私はもう、たゞの名で御免被らう。廣常や、決して惡く思はないで下さいよ、道具を賣つたとて、お金子さへ出來ればまた何うともなる。孫に働のないのぢやあない、まだあれは小兒ぢや、あゝ見えても小兒ぢやから堪忍してやつておくれ。そしての、好このんで出あるきをするのぢやない、內にぢつとして居ては心に濟まぬのであらうから、いまにたしなむ。私も樂になりませう、憂慮うておくれでないよ。」

と小さきからだを伸びあがりて、囘向帳をばさしのぞきぬ。

二

「暗いことねえ、」

お京は空を打仰ぎ、片手を後ざまに、帶の結目丁とさして、小包一個小脇にしながら、足早にぞ來懸りたる。小路の中央を、前途より、衝と來て行逢ひたる男あり。左に避くれば、左に塞り、右に交せば、右を遮り、附絡うて二たび三たび、路を横に切りていであひつ。

「あば、よ、」

と大なる口あけて、故とらしく笑ひたり。見向きもせず、其まゝ片除けて通過ぎむとする時、また身を以て立蔽ひて、

「今晩は、」

屹と見しが、宵闇の空曇りて、ものの色定かならず、唯灰色の姿のみ、裾より下の闇より黑きに、たゞ、素足の白きが仄なり。

「はい、こんばんは。」

ものともせず、落着き澄してお京は答へ、袂を觸れつゝ、ッと拔けて、薄齒の吾妻下駄、臆せず高く響かしながら、悠々と行き過ぐる。

やり過して物蔭より、二人ばかり立顯れ、さきの男と一團になりぬ。

「凄いな。」

「凄いよ、凄いとも。ありやお前、京屋といつて、それ御存じでもあらうが、名代の絲屋の細君

よ。うんさ、舊は娘よ。えゝ誰だつて舊は娘だ？　何を詰らないことを云つてやあがる。凡そ此の國を二ツに仕切ツて、山から手前にや、アノ位な娘は無からうと云つたもんだ。

養子をしてから、もう、さうだ、八年にはならう。此間小いのが一人病院で亡くなつたが、彼で七歳になる兒があるんだ。二人の子持だが、何うだい、何うだ、二人の子持だが何うだつたら、よ。」

「何うしたと。」

「やい、これ、何うしたと云ふやつがあるか。あれでな、二人の子持だが、何うだ。やい、口惜くば何とかいへ。」

「嫌だ、此の野郎、物騒だぜ。」

「物騒だといや、ほんたうよ、己かう見えてもな、一寸からかつてでも見たいと思つて二三年もこれ苦勞をしたと思へ。いつでも、あの生若いなりをして、小面の憎い、小兒を連れなきや戸外へとつては出ないぢやないか。其癖、女中一人連れようぢやないが、何うもな、其處は人情だ、くらがり峠を夜中に一人歩いてても、小兒を連れてると思や、氣の毒で、それ、手もつけられまい。後月まで、まだ、見得も外聞もなしに、二番めのを引背負ひの、トやつて、十文字にかけてたもんだが、幸といふやつもないが、末の兒は亡くなつた。上の方はもう七ツにもなつて居りや、

これ、偶には留守をさせるわ。そこぞ、あゝ身輕に、一人あるきの、ふいと出て來た奴よ。處で、此方もふいと出の、ぐいと占、とやらかさうと思つて、まづお前に瀬ぶみをさしたんだが、いや、恐しく腰が据つてる。何しろ、近所で評判の我まゝもので、いよ、別嬪、などとやると、奥から飛んで出て、御苦勞樣、と來ようといふ、頗俠のお轉婆で、手に合つたものぢやないが、三人よつて、指を銜へるでもあるまいさ。一ツぶツつかつて、おどしてやらうか。」

「何うせ威す方かな、」

「賴もしがられようといふ柄ぢやねえ。」

「其の氣で附合へ。」

「そら、横町からまはつて出ろ。」

ひそ〳〵と語り合ひて、角なる板塀の黑きに消えたり。

「不景氣な獺だよ。」

お京は呟きて顧みつ。夜の辻を唯一人、上着の片裾引きあげつゝ、暗き道を辿りたる、裏道を左に切つて、横町へ出合がしら、左右より男の聲して、

「姉さん、何時だね。」

三

「をばさん。」

と門口より急にばた〳〵と走り入りし、お京は土間に衝と立てば、上框寂寞として、物のある氣勢もせず、見透す障子の破れたる裡に、佛壇の灯幽なり。

打頷き、引返して、再び門に走り出で、敷居越に戸外を窺ひ、

「さあ、來て御覽。時計を見ないかよ、若衆さん、若衆さん、おい。」

早や人の影もあらず、見さだめて、はたと鎖し、

「時代な奴だよ、詰らない。」

と投ぐるが如くいひ棄てつ。やがて内に入りて四邊を見ながら、つか〳〵と上りしが、透間より奥をすかして、此時までも餘念なく、人の來れりとも心着かで、耳疎き媼の看經したる、淋しき姿をうかゞふより、あどけなき笑を洩して、極めて靜に障子をあけ、身を捻り、抜足に、踵を浮して衝と寄りつ。

油をや、さゝむとする、片膝立てし背後より、ものをもいはず優しき手して、丁と其の肩をたたきたり。

數珠を膝に振返れば、身輕く片足あとに退きて、白き手拭の畳みたるを、口にあててぞ聲を呑みたる。

「お京かい。」

「はい。」

「おゝ、吃驚した、惡い女だなう。」

莞爾して、坐りもやらず、

「ほゝゝゝ、伯母さん、不用心よ。」

「お前が、また意地の惡い、わざと抜足で來なさるからぢや。」

「あら、耳が遠い癖に、おほゝゝゝ。眞個はね、門の戸の方は立派に音をさしてがらりと開けたの、遠慮をしないでつか〳〵と入りました。ね、兼ちやんはお留守のやうで、伯母さん一人のやうだから、それから、あの、だもんだから、つい。」

とまた花やかに笑うて坐し、手拭持てる手を横ざまに畳につきて、媼の顏を瞻りたり。

淋しき老も笑み傾け、

「お前幾つだ、いつも其だから先のお婆さんが心配をさツしやつた。子持ではないか、ほんたうに、お前、幾歳になると思はつしやる。

「出ましたね、またおはじめだよ、私が七歳の時も、お前幾歳になる、十歳になつてもお前は幾歳、十五になつてもお前は幾歳になる、二十になつてもお前は幾歳、いつウでも幾歳になる、幾歳になるッて聞かれたわ。伯母さんも姉妹だから、おんなじやうなことばかり言つてらつしやるよ。あんまり口惜いから、いつでもお光に然ういつてやりますわ。光！　お前、幾歳におなりだッて、おほゝゝゝ。」

佛の前を片寄りつゝ、

「お光は何といふ？」

お京は、中指に搦みたる、手拭を放して棄て、少しく顏を傾けながら、左右の手の指を數へて見せ、

「ね、恁うですッて。」

目を上げて差のぞき、

「何だの、其は、二ッと、三ッと、えゝ、二と三、二十三……や、そりや、お前の年紀ぢやあないか。」

「あい。」

お京は故とらしくうつむきたり。

「あてこともない。幾歳ぢやと思ふ、おゝ、またいうた。はや、お光が七つといふに、お前、もうちつと大人しくならぬかい。このあひだ、お此が亡くなつてから、また一層若返つたやうで、困るなう。」

「だつてもね、伯母さん、年增になると、お婿樣に嫌はれます。」

「そんな事があるものか。」

「あら、眞個だわ。」

「しかし、まあ五十年も昔の氣で、兎角言うたとて始まるまいが。可い、可い、若い內が何も花ぢや。世の中はをかしいで可いことさ。お前は氣散じで結構ぢやの。」

「はい、伯母さん。くさ〳〵したッてはじまりません。」

と、正面に燈を顏にうけし、色白く、唇紅く、黑眼勝にうるほうたる、眦凛として切上り、眉一文字に引しまりて、生際に疵の痕、稚き時の過失ならむが、見るからに稍險なり。

引詰め結ひたる銀杏返しの、油氣もなくて亂れしまゝに、奴元結固くしめて、根懸もかけず、簪も插さず。此の廣常が刻めりといふ、花橘の黃金細工の、針ばかりなる髷留のみ、眞中にさし、たるが、今しも血の色、頰にのぼりて、雪なす顏に色を染めし、お京のいつも激ずる時は、殊に人目に立つとぞいふなる、額の疵の、思ひなしか、後毛にふれて動くと見えし、急にまた和ぎた

る、目の中優しく、唇うるほひ、
「あの兼さんは。」と向き直りぬ。

四

「兼は朝つから何處かへ出て行つたが、もう歸りさうなものぢやと思ふけれども、何か、友達の處へでも寄つたのかの。」
「暢氣だことねえ、折角來てやつたものを、居ないぢやあ、私、詰らない。」
「餅でも燒かうの。」
「澤山よ。」
手を掉りて拂ふ眞似する、お京は物足らぬ顏色なり。
「老人を對手ぢやあ詰るまい、もうお歸りかい。」
お京は活潑に瞳を動かし、
「あら、そんなことといふなら歸りやしないわ。はい、まだ〳〵居ます、うむとお邪魔をして參ります。」
媼は背屈みながら手炙に掌を翳し、お京の顏を見て微笑みたり。

「兒を持つても未だ意地が留まないの。ほんたうに、もうちつと、氣を緩くして、穩當にならつしやいよ。
この姉さんは、他に點の打處はないけれど、氣短なばかり、お前、それでは兒が可哀相ぢや。むゝ、髪はのびました、立派に長うなつた。もう〳〵あんなことは二度とするぢやあない、何處にまた氣がくさ〳〵したとつて、婦人が髪を切つて、拋り出すといふのがあります。此のうつくしい姉さんが、あの時はまるで方なしだつた。ほんたうに氣を着けさつしやい。惡いことはいはぬから。」
「はい〳〵、御無理、御道理、畏りましてございます、ほゝゝゝ、兼さんも知つてて？」
「あゝ、知つてるとも。彼もお前、親身のことぢや、お前さんのこつちや心配をして居るわの。」
お京は此の時差俯向き、姿も聲も優しうなりぬ。
「極が惡いねえ。」
「何の、兼にやあ何でもない、婿樣に私はまた、愛想を盡かされるやうなことが、あつてはならぬと思ふから、」
「ふ、」と仰いだる顏の動くに、後毛搖ぎて額の疵、またあり〳〵と顯れつゝ、
「お婿樣、お婿樣ッて嫌だわ、私、お珍しいもののやうに、をばさん羨しきや讓つてあげるわ。」